

# 琉球大学学術リポジトリ

## 沖縄関係 沖縄の航空権益第一巻

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2019-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: - メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/43483">http://hdl.handle.net/20.500.12000/43483</a>

經緯／問題矣

昭和44年11月

佐藤総理大臣の米国訪問

米北一 (70)
外政
1

外務省

## 目次

	頁
第 1 編 佐藤総理大臣米国訪問一行名簿および行事日程	
I 佐藤総理大臣米国訪問一行名簿	1
II 佐藤総理大臣米国訪問行事日程	4
第 2 編 佐藤総理大臣米国訪問に関する公表資料	
第 1 部 共同声明	
I 共同声明	15
II 共同声明に関する愛知外務大臣説明要旨	25
第 2 部 佐藤総理大臣の演説、ステートメントおよび挨拶等	
I グレス空港到着の際のステートメント (11 月 17 日)	33
II ホワイト・ハウス歓迎式における挨拶 (11 月 19 日)	34
III ロジャーズ国務長官主催午餐会における トースト (11 月 19 日)	36
IV ニクソン大統領夫妻主催晩餐会における挨拶 (11 月 19 日)	38
V ホワイト・ハウス出発式における挨拶 (11 月 21 日)	42
VI ホテル・ワシントンにおける邦人記者会見 冒頭発言 (11 月 21 日)	43
VII ナショナル・プレス・クラブにおける演説 (11 月 21 日)	45
VIII 沖繩百万同胞に贈る言葉 (11 月 21 日)	63
IX ニューヨーク空港到着の際のステートメント (11 月 21 日)	64
X サンフランシスコ空港到着の際のステートメント (11 月 23 日)	66
XI アポロ 12 号成功に関するメッセージ (訳文) (11 月 24 日)	68
XII 離米に当たってのニクソン大統領あてメッセージ (訳文) (11 月 25 日)	69
XIII 離米の際のステートメント (11 月 25 日)	71
XIV 羽田空港到着の際の帰国ステートメント (11 月 26 日)	73
第 3 部 米国側の挨拶、メッセージ等	
I ホワイト・ハウス歓迎式におけるニクソン大統領の挨拶 (11 月 19 日)	75

II ニクソン大統領夫妻主催晩餐会における同大統領の挨拶  
(11月19日) .....77

III ホワイト・ハウス出発式におけるニクソン大統領の挨拶  
(11月21日) .....83

IV 佐藤総理の離米に当たってのニクソン大統領のメッセージ  
(11月25日) .....84

(注: 11月19日のロジャーズ國務長官主催午餐会において、同長  
官より極く簡単な挨拶が述べられたが、特にここには収録してい  
ない)

第 1 編

佐藤総理大臣米国訪問一行  
名簿および行事日程

I. 佐藤総理大臣米國訪問一行名簿

総 理 大 臣	佐 藤 栄 作
夫人	佐 藤 寛 子
外 務 大 臣	愛 知 揆 一 夫
官 房 副 長 官	木 村 俊 武
在 米 大 使 夫 人	下 田 田 光
外 務 審 議 官	下 森 治 樹
外務省アメリカ局長	東 郷 文 彦
外務大臣官房審議官	赤 谷 田 一 実
総 理 秘 書 官	小 杉 藤 一 郎
〃	〃 杉 照 夫
〃	(以上公式メンバー)
〃	福 島 讓 二
総 理 秘 書	大 津 邦 正
外務大臣秘書官	村 岡 邦 男
官房長官秘書官	小 島 平 八 郎
外務省条約局条約課長	中 島 敏 次 郎
外務省情報文化局報道課長	大 島 敏 正
在ジュネーブ国際機関 日本政府代表部 二等書記官	渡 辺 允
外務省アメリカ局北米 第一課事務官	佐 藤 行 雄
〃	吉 川 英 男
〃	橋 本 誠 二
〃	坂 元 勲 一
外務省情報文化局報道課事務官	鹿 野 谷 良 一
警 護 官	広 川 泰 康
総 理 秘 書	河 村 昭 子
総理夫人秘書	三 吉 恵
オフィシャル・カメラマン	石 井 幸 之 助

**Members of the Party of Prime Minister Eisaku Sato  
on his Visit to the United States of America**

His Excellency Eisaku Sato	Prime Minister of Japan
Mrs. Eisaku Sato	
His Excellency Kiichi Aichi	Minister for Foreign Affairs
His Excellency Toshio Kimura	State Secretary for the Prime Minister
His Excellency Takeso Shimoda	Ambassador of Japan to the United States of America
Mrs. Takeso Shimoda	
Mr. Haruki Mori	Deputy Vice-Minister for Foreign Affairs
Mr. Fumihiko Togo	Director-General, American Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Gen-ichi Akatani	Councillor of the Ministry of Foreign Affairs
Mr. Minoru Kusuda	Private Secretary to the Prime Minister
Mr. Ichiro Saito	Private Secretary to the Prime Minister
Mr. Teruo Kosugi	Private Secretary to the Prime Minister (The foregoing are the official members.)
Mr. Joji Fukushima	Private Secretary to the Prime Minister
Mr. Masashi Ohtsu	Personal Assistant to the Prime Minister
Mr. Kunio Muraoka	Private Secretary to the Minister for Foreign Affairs

( 2 )

Mr. Heihachiro Kojima	Private Secretary to the State Secretary for the Prime Minister
Mr. Toshijiro Nakajima	Head, Treaties Division, Treaties Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Tadashi Ohtaka	Head, Press Division, Public Information Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Makoto Watanabe	Second Secretary, Permanent Delegation of Japan to International Organizations, Geneva
Mr. Yukio Sato	Official, First North America Division, American Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Hideo Yoshikawa	Official, First North America Division, American Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Seiji Hashimoto	Official, First North America Division, American Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Isao Sakamoto	Official, First North America Division, American Affairs Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Ryoichi Kanoya	Official, Press Division, Public Information Bureau, Ministry of Foreign Affairs
Mr. Yoshiyasu Hirokawa	Police Inspector, Metropolitan Police Department
Mr. Akira Kawamura	Personal Attendant to the Prime Minister
Miss Keiko Miyoshi	Personal Attendant to Mrs. Sato
Mr. Kolmosuke Ishii	Official Cameraman

( 3 )

II. 佐藤総理大臣米國訪問行事日程

(昭和44年11月17日～26日)

(1) 東京～アンカレッジ～ワシントン日程

11月17日(月) {日本時間=アンカレッジ時間+19時間}

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
(16日)	10:00	東京国際空港発 (日航特別機) (昼食機上)	同 行	飛行時間: 6時間40分
21:40	16:40	アンカレッジ空港着		給油, 整備
22:40	17:40	同空港発 (日航特別機) (軽食機上) (朝食機上)		飛行時間: 6時間35分
10:15	(18日) 0:15	ワシントン, ダレス国際 空港着		

(2) ワシントン日程

11月17日(月) (日本時間=ワシントン時間+14時間)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
10:15	(18日) 0:15	ワシントン, ダレス国際 空港着 (出迎者) モスバックー儀典長 ジョンソン国務次官夫妻 ブラウン国務次官補代理 マイヤー駐日大使夫妻 スナイダー駐日米国大使 館公使 フィン日本部長夫妻 下田駐米大使夫妻	同 行	
		ほか (到着ステートメントの 読み上げ)		
10:30	0:30	同 国際空港発		
11:10	1:10	在米大使公邸着		(宿泊)

( 4 )

12:30	2:30	内輪の昼食 (大使公邸, 2階小食堂)		木村官房副長官記者 会見 16:00～16:30 (ホテル・ワシントン) 木村官房副長官ワシ ントン記者団と懇談 19:00～ (ダウングラウン北京)
午後 19:30	9:30	休 養 内輪の夕食 (大使公邸, 1階大食堂)		

11月18日(火)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
午前 13:00	(19日) 3:00	休 養	同 行	
15:00	5:00	内輪の昼食 (大使公邸, 2階小食堂)		
15:15	5:15	在米大使公邸発 ブレア・ハウス着		(宿泊) 木村官房副長官記者 会見 15:55～16:40 (ホテル・ワシントン)
19:30	9:30	内輪の夕食 (ブレア・ハウス)		木村官房副長官記者 懇談 21:00～22:00 (ホテル・ワシントン)

11月19日(水)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
9:25	23:25	ブレア・ハウス発	同 行	公式メンバー及び竹 下議員, 石原議員, 福島秘書官, 小島秘 書官, 大津秘書, 村 岡秘書官, 広川護衛 官, 在米吉野, 中島 両公使夫妻
10:00	(20日) 0:00	ホワイト・ハウス着 歓迎式(南庭, 芝生) (参列者) 大統領夫妻 ロジャーズ国務長官 夫妻		

( 5 )



		軍司令官夫妻 外交団長夫妻 モスバックー儀典長 夫妻 ジョンソン国務次官 夫妻等 (挨拶) (栄誉礼) (夫人、随員退出) ニクソン大統領との 第1回会談 (ホワイト・ハウス)	同 行 ↓	1 時間 40 分 総理、大統領  (注) 第1回会談終了直前10分間外務大臣が参加した外は、会談は両首脳が通訳のみを交えて行なった。 別室待機者 日本側：外務大臣、木村官房副長官、下田大使、森外務審議官、東郷アメリカ局長、赤谷審議官 米側：ロジャーズ国務長官、ジョンソン国務次官、マイヤー大使、グリーン国務次官補、スナイダー公使、フィン日本部長、ホルドリッヅ大統領補佐官 木村官房副長官記者会見(第1回会談後)(ホテル・ワシントン)
(10:30)	(0:30)			
10:30	0:30			
				12:55 ブレア・ハウス発、国務省へ 13:00 アグニュー副大統領夫人主催午餐会 (国務省トーマス・ジェフ・アソンの間)
13:15	(20日) 3:15	ロジャーズ国務長官 主催午餐会		日本側：下記ロジャーズ長官との会談参

		(国務省ジェイムズ・マ ジソン・ルーム) (トースト)  ロジャーズ国務長官 との会談 (国務長官室)  (会談終了後、ブレア・ ハウスへ)  ブレア・ハウス発 ニクソン大統領夫妻 主催晩餐会 (ホワイト・ハウス、ホ ワイト・タイ) (挨拶)	同 行 ↓	加者(木村官房副長官を除く)の他、吉野公使 米側：下記ロジャーズ長官との会談参加者の他、レアード国防長官、キッシンジャー補佐官、トレザイス国務次官補 1 時間 20 分 日本側：外務大臣、木村官房副長官、下田大使、森外務審議官、東郷アメリカ局長、吉野公使、赤谷審議官 米側：ジョンソン国務次官、マイヤー大使、トレザイス国務次官補、スナイダー公使 木村官房副長官記者会見(国務長官と会談後)(ホテル・ワシントン) 日本側：公式メンバー及び石原議員、福島秘書官、大津秘書 米側：関係、議会議長補、財界人、知日家等各夫妻(約100名) 森外務審議官フリーディング(大統領主催晩餐会後)(ホテル・ワシントン)
15:00	(20日) 5:00			
19:55	9:55			
20:00	10:00			

11月20日(木)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
10:00	(21日) 0:00	ニクソン大統領との 第2回会談 (ホワイト・ハウス)	12:20 ブレア・ ハウス発	別室待機者は第1回会談と同じ。 木村官房副長官記者会見(第2回会談後)(ホテル・ワシントン)

13:00	3:00	上院外交委員会主催午餐会 (議事堂)	12:30 ロジャー・ズ國務長官夫人主催午餐会 (スミソニアン・インステイション)	日本側出席者: 外務大臣, 石原議長, 下田大使, 赤谷審議官, 吉野公使
14:50	4:50	ブレア・ハウス発	同 行	
15:00	5:00	アーリントン墓到着 無名戦士の墓及びダレス元國務長官の墓参詣		
15:30	5:30	同墓地発		
15:45	5:45	ブレア・ハウス着		
18:30	8:30	在米大使夫妻主催レセプション		日本側: 一行全員, 同行記者, ワシントン滞在有力者
20:00	10:00	(大使公邸)		米側: 関係, 政府, 議会, 政・財界, 言論・報道界, 社交界各有力者
				外交団 ワシントン駐在本邦各紙支局長等, 計 1,100 名招待 木村官房副長官記者懇談 (レセプション終了後) (ホテル・ワシントン)

11月21日(金)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
10:21	(22日) 0:21	ニクソン大統領との第3回会談 (ホワイト・ハウス)	午 前 スタングズ 商務長官 夫人私邸 訪問	別室待機者は, 第1回第2回会談と同じ
11:10	1:10	出発式 (ホワイト・ハウス, ローズ・ガーデン) (挨拶) 共同声明発表		

11:30	1:30	邦人記者会見 (ホテル・ワシントン)		外務大臣, 木村官房副長官同席
12:00	2:00			記者会見に続いて 12:00~12:40 愛知外務大臣による 共同声明に関する解説 (佐藤総理大臣の「沖縄 縛百万同胞に送る言葉」 を日本時間 23日 朝刊用として, アド ヴァンス配布) 2 時間
12:30	2:30	ナショナル・プレス・クラブ主催午餐会 (プレス・クラブ) (スピーチ)	12:15 内輪の昼食 (ブレア・ハウス)	
14:30	4:30	ナショナル・プレス・クラブ発 (ブレア・ハウス経由)	同 行	
15:00	5:00	アンドルース空軍基地着		
15:15	5:15	同空軍基地発 (米国政府特別機) (見送者) ジョンソン 國務次官夫妻 マイヤー大使夫妻 スナイター公使 フィン日本部長		飛行時間: 1 時間 モスバックー儀典長 同乗 (ニューヨーク, ウェストチェスター 空港まで)
16:18	6:18	ニューヨーク, ウェスト チェスター空港着		

(3) ニューヨーク日程

11月21日(金) (日本時間=ニューヨーク時間+14時間)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
16:18	(22日) 6:18	ニューヨーク, ウェスト チェスター空港着 (出迎者) マイケリアン・ウェスト チェスター郡長夫妻 ヘンデイ市長夫妻 ジャビロ・ジャパン・ソ サエティ 副会長 鶴岡国連大使夫妻 近藤大使 安倍大使夫妻 内田総領事夫妻 山田日本クラブ会長夫妻 榎野日人会会長 等	同 行	

17:25	7:25	(到着ステートメント配布) ウォルドルフ・アストリア・ホテル (タワーズ) 着	同 行	(宿泊)
18:20	8:20	同ホテル発		
18:30	8:30	ホテル・ビエール着		
20:00	10:00	日米協会、日本商業会議所、日本クラブ極東米商工評議会、4 団体共催レセプション (ホテル・ビエール、グラント・ホール・ルーム)		ホテル到着後、約15分間小憩 (3910-11 号室)
20:00	10:00	ロックフェラー三世主催非公式晩餐会 (スタッグ) (ホテル・ビエール) (挨拶)	20:05 ホテル・ビエール発	木村官房副長官各社個別会見 21:00~22日1:50
			20:15 ~22:35 ロックフェラー三世夫人招待観劇 (リンカーン・センター)	(ウォルドルフ・アストリア・ホテル及びNBC スタジオ) 愛知大臣各社個別会見 22:30~22日1:30 (場所同上)

11月22日 (土)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
(11:00)	(23日) (1:00)	休 養	同 行	
19:30	9:30	ウォルドルフ・アストリア・ホテル (タワーズ) 発、郊外ドライブ 内田総領事夫妻主催非公式夕食会 (総領事公邸)		愛知大臣主催同行記者夕食会 21:45~23:30 (サン・ラック・インベリアル・レストラン)

11月23日 (日)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
10:00	(24日) 0:00	ウォルドルフ・アストリア	同 行	

10:45	0:45	ア・ホテル (タワーズ) 発	同 行	
11:00	1:00	ニューヨーク・ケネディ国際空港着 同国際空港発 (見送者) バーマ・ニューヨーク市長代理 シャピロ・ジャパン・ソサエティ副会長 近藤大使 安倍大使夫妻 内田総領事夫妻 山田日本クラブ会長 榎野日系人協会会長 (日航特別機) (昼食機上) (軽食機上)		飛行時間: 6時間20分
14:20	7:20	サンフランシスコ国際空港着		

(4) サンフランシスコ日程

11月23日 (日) (日本時間=サンフランシスコ時間+17時間)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
14:20	(24日) 7:20	サンフランシスコ国際空港着 (出迎者) マグニン・サンフランシスコ市名誉儀典長 カウプマン同僚伴長夫妻 ハズバンズ・カリフォルニア州儀典長代理 ペーレンズ在サンフランシスコ国務省代表(女性) ヒューム州名誉儀典長夫妻 ブラムシュエット日米協会会長夫妻 ホードレイ日本週間委員 長夫妻 ミューリアル加州国際貿易評議会会長夫妻 島総領事夫妻 栗原北加日本人商業会議所会頭夫妻 宮原サンフランシスコ日米協会会長 力丸加州日本人慈恵会会長	同 行	

14:30	7:30	(到着ステートメント配布) 同国際空港発	同 行	
14:55	7:55	マーク・ホプキンス・ホテル着		(宿泊)
15:45	8:45	在サンフランシスコ新聞記者等との懇談		
16:15	9:15	(マーク・ホプキンス・ホテル)		
19:10	12:10	内輪の夕食会 (総領事公邸)		木村官房副長官主催 同行記者団夕食会 (大和スキャキ)
22:00	15:00	マーク・ホプキンス・ホテル着		

11月24日(月)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
午前	(25日)	休 養		
10:30	3:30	同行記者団との懇談		
12:00	5:00	同行記者団と昼食		
13:30	6:30	(マーク・ホプキンス・ホテル、ゴールデン・エンパイヤー・ルーム)		
		(引続き記者団と懇談)		
14:30	7:30	日系及び在留邦人団体代表表敬		
14:45	7:45	(マーク・ホプキンス・ホテル)		
14:50	7:50	湾岸地帯ドライブ	同 行	ホテル〜オペラ・ハウス〜オークランド・ベイ・ブリッジ〜パークレー加州大学構内〜リッチモンド・ブリッジ〜サウス・サリット市〜金門橋〜金門公園〜ホテル
16:40	9:40			楠田秘書官主催同行記者団及び特別機乗務員招待夕食会(総理夫人御出席) (東京スキャキ)

(5) サンフランシスコ〜アンカレッジ〜東京日程

11月25日(火)

現地時間	日本時間	総 理	総理夫人	備 考
8:05	(26日) 1:05	マーク・ホプキンス・ホテル発	同 行	
8:40	1:40	サンフランシスコ国際空港着		
8:50	1:50	同国際空港発 (日航特別機) (見送者)		飛行時間: 4時間45分
		マグニン・サンフランシスコ名誉儀典長 カウフマン同接伴長 ハズバンズ・カリフォルニア州儀典長代理 ペーレンズ在サンフランシスコ国務省代表 (女性) ブラムシュテット・日米協会会長夫妻 ホードレイ日本週間委員長夫妻 ミューリアル加州貿易評議会会長夫妻 下田大使夫妻 島総領事夫妻 栗原北加日本人商業会議所会頭夫妻 宮原サンフランシスコ日米会会長 力丸加州日本人慈善会会長		
		(離米ステートメント配布)		
		(ニクソン大統領あて離米メッセージ打電)		
		(朝食機上)		
11:35	6:35	アンカレッジ空港着		給油, 整備
12:35	7:35	同 空港発 (昼食機上)		飛行時間: 7時間35分

12月26日(水)

現地時間	日本時間	総理	総理夫人	備考
15:10		東京国際空港着 (帰国ステートメント)	同行	

第 2 編  
佐藤総理大臣米国訪問に  
関する公表資料

## 第1部 共同声明

### I. 佐藤総理大臣とリチャード・M・ニクソン

#### 大統領との間の共同声明

(昭和44年11月21日)

1. 佐藤総理大臣とニクソン大統領は、11月19日、20日及び21日にワシントンにおいて会談し、現在の国際情勢及び日米両国が共通の関心を有する諸問題に関し意見を交換した。
2. 総理大臣と大統領は、各種の分野における両国間の緊密な協力関係が日米両国にもたらしてきた利益の大なることを認め、両国が、ともに民主主義と自由の原則を指針として、世界の平和と繁栄の不断の探求のため、どくに国際緊張の緩和のため、両国の成果ある協力を維持強化していくことを明らかにした。大統領は、アジアに対する大統領自身及び米國政府の深い関心を披瀝し、この地域の平和と繁栄のため日米両国が相協力して貢献すべきであるとの信念を述べた。総理大臣は、日本はアジアの平和と繁栄のため今後も積極的に貢献する考えであることを述べた。
3. 総理大臣と大統領は、現下の国際情勢、特に極東における事態の発展について隔意なく意見を交換した。大統領は、この地域の安定のため域内諸国にその自主的努力を期待する旨を強調したが、同時に米國は域内における防衛条約上の義務は必ず守り、もって極東における国際の平和と安全の維持に引き続き貢献するものであることを確言した。総理大臣は、米國の決意を多とし、大統領が言及した義務を米國が十分に果たしうる態勢にあることが極東の平和と安全にとって重要であることを強調した。総理大臣は、さらに、現在の情勢の下においては、米軍の極東における存在がこの地域の安定の大きなささえとなっているという認識を述べた。
4. 総理大臣と大統領は、特に、朝鮮半島に依然として緊張状態が存在することに注目した。総理大臣は、朝鮮半島の平和維持のための国際連合の努力を高く評価し、韓国の安全は日本自身の安全にとって緊要であると述べた。総理大臣と大統領は、中共がその対外関係においてより協調的かつ建設的な態度をとるよう期待する点において双方一致していることを認めた。大統領は、米國の中華民国に対する条約上の義務に言及し、米國はこれを遵守するものであると述べた。総理大臣は、台湾地域における平和と

安全の維持も日本の安全にとってきわめて重要な要素であると述べた。大統領は、ベトナム問題の平和的かつ正当な解決のための米国の誠意ある努力を説明した。総理大臣と大統領は、ベトナム戦争が沖縄の施政権が日本に返還されるまでに終結していることを強く希望する旨を明らかにした。これに関連して、両者は、万一ベトナムにおける平和が沖縄返還予定時に至るも実現していない場合には、両国政府は、南ベトナム人民が外部からの干渉を受けずにその政治的将来を決定する機会を確保するための米国の努力に影響を及ぼすことなく沖縄の返還が実現されるように、そのときの情勢に照らして十分協議することに意見の一致をみた。総理大臣は、日本としてはインドシナ地域の安定のため果たしうる役割を探求している旨を述べた。

5. 総理大臣と大統領は、極東情勢の現状及び見通しにかんがみ、日米安保条約が日本を含む極東の平和と安全の維持のため果たしている役割をともに高く評価し、相互信頼と国際情勢に対する共通の認識の基礎に立って安保条約を堅持すると両国政府の意図を明らかにした。両者は、また、両国政府が日本を含む極東の平和と安全に影響を及ぼす事項及び安保条約の実施に関し緊密な相互の接触を維持すべきことに意見の一致をみた。
6. 総理大臣は、日米友好関係の基礎に立って沖縄の施政権を日本に返還し、沖縄を正常な姿に復するようにとの日本本土及び沖縄の日本国民の強い願望にこたえるべき時期が到来したとの見解を説いた。大統領は、総理大臣の見解に対する理解を示した。総理大臣と大統領は、また、現在のよ様な極東情勢の下において、沖縄にある米軍が重要な役割を果たしていることを認めた。討議の結果、両者は、日米両国共通の安全保障上の利益は、沖縄の施政権を日本に返還するための取決めにおいて満たしうることと意見が一致した。よって、両者は、日本を含む極東の安全をそこなうことなく沖縄の日本への早期復帰を達成するための具体的な取決めに関し、両国政府が直ちに協議に入ることに合意した。さらに、両者は、立法府の必要な支持をえて前記の具体的取決めが締結されることを条件に千九百七十二年中に沖縄の復帰を達成するよう、この協議を促進すべきことに合意した。これに関連して、総理大臣は、復帰後は沖縄の局地防衛の責務は日本自体の防衛のための努力の一環として徐々にこれを負うとの日本政府の意図を明らかにした。また、総理大臣と大統領は、米國が、沖縄において両国共通の安全保障上必要な軍事上の施設及び区域を日米安保条約に基づいて保持することにつき意見が一致した。
7. 総理大臣と大統領は、施政権返還にあたっては、日米安保条約及びこれに関連する諸取決めが変更なしに沖縄に適用されることに意見の一致を

みた。これに関連して、総理大臣は、日本の安全は極東における国際の平和と安全なくしては十分に維持することができないものであり、したがって極東の諸国の安全は日本の重大な関心事であるとの日本政府の認識を明らかにした。総理大臣は、日本政府のかかる認識に照らせば、前記のよ様な態様による沖縄の施政権返還は、日本を含む極東の諸国の防衛のために米國が負っている国際義務の効果的遂行の妨げとなるようなものではないとの見解を表明した。大統領は、総理大臣の見解と同意である旨を述べた。

8. 総理大臣は、核兵器に対する日本国民の特殊な感情及びこれを背景とする日本政府の政策について詳細に説明した。これに対し、大統領は、深い理解を示し、日米安保条約の事前協議制度に関する米國政府の立場を害することなく、沖縄の返還を、右の日本政府の政策に背馳しないよう実施する旨を総理大臣に確約した。
9. 総理大臣と大統領は、沖縄の施政権の日本への移転に関連して両国間において解決されるべき諸般の財政及び経済上の問題（沖縄における米國企業の問題も含む。）があることに留意して、その解決についての具体的な話し合いをすみやかに開始することに意見の一致をみた。
10. 総理大臣と大統領は、沖縄の復帰に伴う諸問題の複雑性を認め、両国政府が、相互に合意されるべき返還取決めに従って施政権が円滑に日本政府に移転されるようにするために必要な諸措置につき緊密な協議を行ない、協力すべきことに意見の一致をみた。両者は、東京にある日米協議委員会がこの準備作業に対する全般的責任を負うべきことに合意した。総理大臣と大統領は、琉球政府に対する必要な助力を含む施政権の移転の準備に関する諸措置についての現地における協議及び調整のため、現存の琉球列島高等弁務官に対する諮問委員会に代えて、沖縄に準備委員会を設置することとした。準備委員会は、大使級の日本政府代表及び琉球列島高等弁務官から成り、琉球政府行政主席が委員会の顧問となる。同委員会は、日米協議委員会を通じて両国政府に対し報告及び勧告を行なうものとする。
11. 総理大臣と大統領は、沖縄の施政権の日本への返還は、第二次大戦から生じた日米間の主要な懸案の最後のものであり、その双方にとり満足な解決は、友好と相互信頼に基づく日米関係を一層固めるゆえんであり、極東の平和と安全のために貢献するところも大なるべきことを確信する旨披露した。
12. 経済問題の討議において、総理大臣と大統領は、両国間の経済関係の著しい発展に注目した。両者は、また、両国が世界経済において指導的地位を占めているに伴い、特に貿易及び国際収支の大幅な不均衡の現状に

照らしても、国際貿易及び国際通貨の制度の維持と強化についてそれぞれ重要な責任を負っていることを認めた。これに関連して、大統領は、米国内におけるインフレーションを抑制する決意を強調した。また、大統領は、より自由な貿易を促進するとの原則を米国が堅持すべきことを改めて明らかにした。総理大臣は、日本の貿易及び資本についての制限の縮小をすみやかに進めるとの日本政府の意図を示した。具体的には、総理大臣は、広い範囲の品目につき日本の残存輸入数量制限を千九百七十一年末までに廃止し、また、残余の品目の自由化を促進するよう最大限の努力を行なうとの日本政府の意図を表明した。総理大臣は、日本政府としては、貿易自由化の実施を従来より一層促進するよう、一定の期間を置きつつその自由化計画の見直しを行なっていく考えである旨付言した。総理大臣と大統領は、このような両国のそれぞれの方策が日米関係全般の基礎を一層強固にするであろうということに意見の一致をみた。

13. 総理大臣と大統領は、開発途上の諸国の経済上の必要と取り組むことが国際の平和と安定の促進にとって緊要であることに意見の一致をみた。総理大臣は、日本政府としては、日本経済の成長に応じて、そのアジアに対する援助計画の拡大と改善を図る意向であると述べた。大統領は、この総理大臣の発言を歓迎し、米国としても、アジアの経済開発に引き続き寄与するものであることを確認した。総理大臣と大統領は、ヴェトナム戦後におけるヴェトナムその他の東南アジアの地域の復興を大規模に進める必要があることを認めた。総理大臣は、このため相当な寄与を行なうとの日本政府の意図を述べた。

14. 総理大臣は、大統領に対し、アポロ十二号が月面に到着に成功したことについて祝意を述べるとともに、宇宙飛行士たちが無事地球に帰還するよう祈念を表明した。総理大臣と大統領は、宇宙の探査が科学の分野における平和目的の諸事業についての協力関係をすべての国の間において拡大する広範な機会をもたらすものであることに意見の一致をみた。これに関連して、総理大臣は、日米両国が本年夏に宇宙協力に関する取決めを結んだことを喜びとする旨述べた。総理大臣と大統領は、この特別な計画の実施が両国にとって重要なものであることに意見の一致をみた。

15. 総理大臣と大統領は、軍備管理の促進と軍備拡大競争の抑制の見直しについて討議した。大統領は、最近ヘルシンキにおいて緒についたソヴェト連邦との戦略兵器の制限に関する討議を開始することについての米政府の努力の概要を述べた。総理大臣は、日本政府がこの討議の成功を強く希望する旨述べた。総理大臣は、厳重かつ効果的な国際的管理の下における全面的かつ完全な軍縮を達成するよう、効果的な軍縮措置を実現する

ことについて日本が有している強い伝統的な関心を指摘した。

### Joint Communique between President Richard M. Nixon and Prime Minister Eisaku Sato

November 21, 1969

1. President Nixon and Prime Minister Sato met in Washington on November 19, 20 and 21, 1969 to exchange views on the present international situation and on other matters of mutual interest to the United States and Japan.

2. The President and the Prime Minister recognized that both the United States and Japan have greatly benefited from their close association in a variety of fields, and they declared that guided by their common principles of democracy and liberty, the two countries would maintain and strengthen their fruitful cooperation in the continuing search for world peace and prosperity and in particular for the relaxation of international tensions. The President expressed his and his government's deep interest in Asia and stated his belief that the United States and Japan should cooperate in contributing to the peace and prosperity of the region. The Prime Minister stated that Japan would make further active contributions to the peace and prosperity of Asia.

3. The President and the Prime Minister exchanged frank views on the current international situation, with particular attention to developments in the Far East. The President, while emphasizing that the countries in the area were expected to make their own efforts for the stability of the area, gave assurance that the United States would continue to contribute to the maintenance of international peace and security in the Far East by honoring its defense treaty obligations in the area. The Prime Minister, appreciating the determination of the United States, stressed that it was important for the peace and security of the Far East that the United States should be in a position to carry out fully its obligations referred to by the President. He further expressed his recognition



that, in the light of the present situation, the presence of United States forces in the Far East constituted a mainstay for the stability of the area.

4. The President and the Prime Minister specifically noted the continuing tension over the Korean peninsula. The Prime Minister deeply appreciated the peacekeeping efforts of the United Nations in the area and stated that the security of the Republic of Korea was essential to Japan's own security. The President and the Prime Minister shared the hope that Communist China would adopt a more cooperative and constructive attitude in its external relations. The President referred to the treaty obligations of his country to the Republic of China which the United States would uphold. The Prime Minister said that the maintenance of peace and security in the Taiwan area was also a most important factor for the security of Japan. The President described the earnest efforts made by the United States for a peaceful and just settlement of the Viet-Nam problem. The President and the Prime Minister expressed the strong hope that the war in Viet-Nam would be concluded before return of the administrative rights over Okinawa to Japan. In this connection, they agreed that, should peace in Viet-Nam not have been realized by the time reversion of Okinawa is scheduled to take place, the two governments would fully consult with each other in the light of the situation at that time so that reversion would be accomplished without affecting the United States efforts to assure the South Vietnamese people the opportunity to determine their own political future without outside interference. The Prime Minister stated that Japan was exploring what role she could play in bringing about stability in the Indo-China area.

5. In light of the current situation and the prospects in the Far East, the President and the Prime Minister agreed that they highly valued the role played by the Treaty of Mutual Cooperation and Security in maintaining the peace and security of the Far East including Japan, and they affirmed the intention of the two governments firmly to maintain the Treaty on the basis of mutual trust and common evaluation of the international situation. They further

agreed that the two governments should maintain close contact with each other on matters affecting the peace and security of the Far East including Japan, and on the implementation of the Treaty of Mutual Cooperation and Security.

6. The Prime Minister emphasized his view that the time had come to respond to the strong desire of the people of Japan, of both the mainland and Okinawa, to have the administrative rights over Okinawa returned to Japan on the basis of the friendly relations between the United States and Japan and thereby to restore Okinawa to its normal status. The President expressed appreciation of the Prime Minister's view. The President and the Prime Minister also recognized the vital role played by United States forces in Okinawa in the present situation in the Far East. As a result of their discussion, it was agreed that the mutual security interests of the United States and Japan could be accommodated within arrangements for the return of the administrative rights over Okinawa to Japan. They therefore agreed that the two governments would immediately enter into consultations regarding specific arrangements for accomplishing the early reversion of Okinawa without detriment to the security of the Far East including Japan. They further agreed to expedite the consultations with a view to accomplishing the reversion during 1972 subject to the conclusion of these specific arrangements with the necessary legislative support. In this connection, the Prime Minister made clear the intention of his government, following reversion, to assume gradually the responsibility for the immediate defense of Okinawa as part of Japan's defense efforts for her own territories. The President and the Prime Minister agreed also that the United States would retain under the terms of the Treaty of Mutual Cooperation and Security such military facilities and areas in Okinawa as required in the mutual security of both countries.

7. The President and the Prime Minister agreed that, upon return of the administrative rights, the Treaty of Mutual Cooperation and Security and its related arrangements would apply to Okinawa without modification thereof. In this connection, the

Prime Minister affirmed the recognition of his government that the security of Japan could not be adequately maintained without international peace and security in the Far East and, therefore, the security of countries in the Far East was a matter of serious concern for Japan. The Prime Minister was of the view that, in the light of such recognition on the part of the Japanese Government, the return of the administrative rights over Okinawa in the manner agreed above should not hinder the effective discharge of the international obligations assumed by the United States for the defense of countries in the Far East including Japan. The President replied that he shared the Prime Minister's view.

8. The Prime Minister described in detail the particular sentiment of the Japanese people against nuclear weapons and the policy of the Japanese Government reflecting such sentiment. The President expressed his deep understanding and assured the Prime Minister that, without prejudice to the position of the United States Government with respect to the prior consultation system under the Treaty of Mutual Cooperation and Security, the reversion of Okinawa would be carried out in a manner consistent with the policy of the Japanese Government as described by the Prime Minister.

9. The President and the Prime Minister took note of the fact that there would be a number of financial and economic problems, including those concerning United States business interests in Okinawa, to be solved between the two countries in connection with the transfer of the administrative rights over Okinawa to Japan and agreed that detailed discussions relative to their solution would be initiated promptly.

10. The President and the Prime Minister, recognizing the complexity of the problems involved in the reversion of Okinawa, agreed that the two governments should consult closely and cooperate on the measures necessary to assure a smooth transfer of administrative rights to the Japanese Government in accordance with reversion arrangements to be agreed to by both governments. They agreed that the United States-Japan Consultative Committee in Tokyo should undertake overall responsibility for this preparatory work.

The President and the Prime Minister decided to establish in Okinawa a Preparatory Commission in place of the existing Advisory Committee to the High Commissioner of the Ryukyu Islands for the purpose of consulting and coordinating locally on measures relating to preparation for the transfer of administrative rights, including necessary assistance to the Government of the Ryukyu Islands. The Preparatory Commission will be composed of a representative of the Japanese Government with ambassadorial rank and the High Commissioner of the Ryukyu Islands, with the Chief Executive of the Government of the Ryukyu Islands acting as adviser to the Commission. The Commission will report and make recommendations to the two governments through the United States-Japan Consultative Committee.

11. The President and the Prime Minister expressed their conviction that a mutually satisfactory solution of the question of the return of the administrative rights over Okinawa to Japan, which is the last of the major issues between the two countries arising from the Second World War, would further strengthen United States-Japan relations, which are based on friendship and mutual trust and would make a major contribution to the peace and security of the Far East.

12. In their discussion of economic matters, the President and the Prime Minister noted the marked growth in economic relations between the two countries. They also acknowledged that the leading positions which their countries occupy in the world economy impose important responsibilities on each for the maintenance and strengthening of the international trade and monetary system, especially in the light of the current large imbalances in trade and payments. In this regard, the President stressed his determination to bring inflation in the United States under control. He also reaffirmed the commitment of the United States to the principle of promoting freer trade. The Prime Minister indicated the intention of the Japanese Government to accelerate rapidly the reduction of Japan's trade and capital restrictions. Specifically, he stated the intention of the Japanese Government to remove Japan's residual import

quota restrictions over a broad range of products by the end of 1971, and to make maximum efforts to accelerate the liberalization of the remaining items. He added that the Japanese Government intends to make periodic reviews of its liberalization program with a view to implementing trade liberalization at a more accelerated pace than hitherto. The President and the Prime Minister agreed that their respective actions would further solidify the foundation of overall United States-Japan relations.

13. The President and the Prime Minister agreed that attention to the economic needs of the developing countries was essential to the development of international peace and stability. The Prime Minister stated the intention of the Japanese Government to expand and improve its aid programs in Asia commensurate with the economic growth of Japan. The President welcomed this statement and confirmed that the United States would continue to contribute to the economic development of Asia. The President and the Prime Minister recognized that there would be major requirements for the post-war rehabilitation of Viet-Nam and elsewhere in Southeast Asia. The Prime Minister stated the intention of the Japanese Government to make a substantial contribution to this end.

14. The Prime Minister congratulated the President on the successful moon landing of Apollo XII, and expressed the hope for a safe journey back to earth for the astronauts. The President and the Prime Minister agreed that the exploration of space offers great opportunities for expanding cooperation in peaceful scientific projects among all nations. In this connection, the Prime Minister noted with pleasure that the United States and Japan last summer had concluded an agreement on space cooperation. The President and the Prime Minister agreed that implementation of this unique program is of importance to both countries.

15. The President and the Prime Minister discussed prospects for the promotion of arms control and the slowing down of the arms race. The President outlined his government's efforts to initiate the strategic arms limitations talks with the Soviet Union that have recently started in Helsinki. The Prime Minister expressed his

government's strong hopes for the success of these talks. The Prime Minister pointed out his country's strong and traditional interest in effective disarmament measures with a view to achieving general and complete disarmament under strict and effective international control.

## II. 共同声明に関する外務大臣説明要旨

(昭和44年11月21日)

### 1. (全般)

この共同声明は、日米両国共通の関心事に関する佐藤総理とニクソン大統領の会談内容を盛ったものでありますが、なんといっても沖縄の平和的返還という、世界史上稀な出来事についての基本的合意が特筆大書されるべき点であります。しかもこの返還に当り総理も述べたごとく交渉に当たっての日本側主張たるいわゆる「72年、核抜き、本土並み」の三つの基本原則をすべて実現することができたことも、沖縄県民をはじめとする日本国民の強い支援と、日米両国間の強い友好信頼関係の賜物であるとともに、わが国外交史上画期的な意義をもっております。今回の交渉を通じて米側は、当然ながら主に沖縄基地の抑止力維持に強い関心を示し、特に核については、ワシントンでの両首脳会談においてはじめて結論ができたことは御承知のとおりであります。日米双方の当事者は両国共通の利害をふまえて、夫々の国益の命ずるところに従い、辛穡強く一つ一つ問題解決の努力を重ね、誠意をもって交渉して参りました。その結果、時を同じうして貿易経済面において困難な懸案を抱えつつも、領土問題といういわば国家・民族の存立の基盤にもかかわる超重要事項について、日米双方の満足する成果を挙げることができたのであります。かくて日米両国最高首脳の名において、双方の政策上の見解と方針を記録にとどめたこの共同声明が出来上りました。沖縄返還問題は、これから交渉される返還協定によって、わが国においては国会の承認を、米国においても議会の支持をえて法的に、かつ、最終的に取決められますが、この共同声明に盛り込まれた事柄は、両国最高首脳の方々の一致点を示すものとして最も強い政治的、道義的な力を持つものであります。

全国民の悲願の実現の軌道を敷きえたわが国と、不自然な沖縄の地位とのかかわりを断ちえた米国とは、ともにうるところ多大であり、これによ

り1970年代に向っての日米関係は磐石の基礎の上におかれることとなりました。

#### 2. (世界・アジアの平和と繁栄——第1, 2項)

第1項と第2項は、共同声明全体の基調を示したもので、総理と大統領は、自由世界第1及び第2の経済的実力を持つ国同志にふさわしく、スケール大きく、かつ、70年代への長期展望に立った話し合いにより、緊密な日米関係を出発点として、特に国際緊張の緩和、世界及びアジアの経済発展、民生安定への貢献を通じ、平和と繁栄に向って協力することを明らかにしたものであります。

#### 3. (極東情勢についての意見交換——第3項)

この項は安保条約でいうところの極東の安全、換言すれば戦争防止が、効果的な抑止力としての米軍の極東における存在によって支えられているという現実に対する両首脳の見解を明らかにしたものであります。すなわち、総理は大統領が強調した極東の安全保障に対する米政府の基本的姿勢を支持しつつ、抑止力としての米軍の極東における存在を積極的に評価し、また効果的な抑止力の維持の必要という一般的見地から、米国が既存の防衛条約上の義務を、必ず守るといふ決意をいつでも実証しうるような態勢にあることが望ましいとの考え方を示したものであります。以上はいずれも米軍の極東における存在一般の評価を述べたもので、米軍の具体的な配備ぶりとか装備ぶりについて論じたものでないことはいうまでもありません。また共同声明のあとの部分に出てくる沖繩返還の態様、あるいは事前協議制の運用の問題と直接関係がないことも同様であります。

#### 4. (地域別の情勢の検討——第4項)

第4項は第3項を敷衍して、現に軍事的緊張または紛争が存する朝鮮、台湾及びインドシナ半島の各地域の情勢に関する両首脳の見解を記したものであります。韓国及び台湾についての総理の見解は、現在の極東情勢の下において、わが国が韓国及び台湾の安全を、日本の安全確保との関連で、一般的にどのように認識しているかを明らかにしたものであります。総理がすでに記者会見で述べたとおり、特に韓国に対する武力攻撃が万一発生すれば、これは当然わが国の安全に重大な影響を及ぼすものであります。従って万一かかる事態が起った際、これに対処するため、仮に米国より安保条約上の事前協議が行なわれれば、政府はこの一般的認識を判断の重要な要因として、その態度を決定することは、もとより国益上当然のことと考えられます。また、台湾地域に対する武力攻撃発生という事態は、幸いにして現在予見されませんものの、これもわが国の安全にとって大変重要な要素であり、わが国はこのことを十分認識しておく必要があります。

よう。もとより国際緊張の緩和は日米両国の大きな目的であり、共同声明にも両首脳が中共がより協力的・建設的な対外態度をとることを期待する点で一致していることを記していることに御留意願います。

ここで一つ特に強調しておきたいことは、事前協議において政府がとるべき態度の決定は、あくまでわが国益、すなわち、日本の安全にとって必要か否かの判断に立って行なわれることで、米国が他国と防衛条約を結んでいるがゆえに当然に行なわれるものではない、ということです。共同声明の表現もまさにかかる見地に立っているものであります。

次に、アジアにおける現下の最大の問題の一つとして両首脳が取り上げたヴィエトナム問題については、両首脳とも、沖繩返還までに戦争が終結していることを強く希望し、総理としてもインドシナの安定と復興に果しうべき日本の役割りの探求に言及しています。日本政府としては、米国が和平実現のため真剣な努力を払っている以上、北越側にこれに応ずる誠意がある限り、返還時になっても平和が実現していないという事態は、実際問題としてまず起りえないものと考えます。しかしながら、現在和平交渉中の米国としては、特定の時点までに戦争を必ず終結させると一方的にコミットする立場がなく、可能性の問題としては、平和が実現していない事態を排除しえない事情も当然理解されます。よって、万が一このような事態となった場合、具体的にいかなる選択がありうるかは、その段階で両国政府が諸般の情勢を十分考慮に入れつつ協議して判断すればよい、というのが本項のこのくだりの意味であります。南ヴィエトナム人民の民族自決の権利が確保されるような公正な和平の達成を期するという米国の基本政策は、わが国も従来から支持してきたところであります。このための米国の努力に対し沖繩返還が具体的にいかなる影響を及ぼしうるか、影響ある場合にいかなる幾多の選択がありうるかは、現在の時点では判定しうるわけには行かないので、これを将来の万一の場合の協議にゆだねたのであります。ここにいう「協議」とは、安保条約に基づく「事前協議」ではありません。

以上の各地域についての意見交換を通じて、いうまでもないことながら、日本側としてはいわゆる「事前協議に関する許諾の予約」を如何なる意味でも全く行なっていないという当然のことを、念のためつけ加えさせていただきます。

#### 5. (安保条約堅持の意図表明——第5項)

この項で両首脳は、わが国はじめ極東の平和と安全の維持に大きく貢献している安保条約の堅持を、相互に表明し合ったのであります。これはもとより両国それぞれの条約の廃棄権を制限して条約の有効期間を固定す

るがごとき法的合意でないことは多言を要しません。また両国政府が今後とも通常の外交経路や安全保障協議委員会等を通じて従来から行ってきた意思の疏通のための、緊密な相互の接触を続けて行くことに一致しましたが、これは今までと同様、流動的な国際情勢の下にわが国の安全の確保に万全を期するためであります。

#### 6. (沖縄返還の時期——第6項)

この共同声明の一つの大きな柱ともいうべきこの項では、両首脳は、両国政府が沖縄の返還を1972年中に実現するため返還協定締結交渉を直ちに開始することに合意した旨明らかにされています。

なお、協定案が出来た上は、米側は、その締結に当って、議会の何らかの支持をうる必要があるので、共同声明において、その点に言及しておりますがわが国においては国会の承認を必要とすることは申すまでもありません。なお総理が述べたように、いわゆる復帰ショックをなくして、沖縄県民の皆様が安心して日本に帰って頂くことを考えれば、この程度の準備期間は必要であり、この点を考慮すれば、72年中の返還は、実質的には「即時返還」と同じであります。

なお本項での文言は、お気付のことと思いますが、昭和42年の佐藤・ジョンソン共同声明のうちの小笠原返還に関する合意の部分と全く同じ表現が使われていることに御留意願います。

同じく当然なことは、返還後わが国の領域に戻った沖縄の局地防衛責任が日本に帰することで、政府は最善のペースで徐々これを實現して行く考えであります。現在のような極東情勢の下において、沖縄における米軍基地が重要な役割りを果していることは申すまでもなく、今後とも引き続きその機能を有効に發揮することはわが国の安全にとって極めて必要であります。しかし、これらの基地は復帰後は、本土と同様に、すべて安保条約に基づく施設・区域として地位協定に従い日米間の合意によって使用を許されるのであります。従って既存の米軍基地がそのまま既得権として存続するのではないことは自明の理であります。

#### 7. (沖縄返還の態様——第7項)

この項と次の第8項は、沖縄の本土並み返還につき両首脳の意見が一致したことを明らかにしたもので共に、共同声明の中核的部分の一つであります。両首脳の話合の結果はすべて、共同声明にもられており、秘密の了解というようなものは全然ありません。この項に明らかなように現行安保条約及び関連取決めはそのままの特別取決めなしに沖縄に適用されるという、わが国の基本的立場を米国が受入れたことがはっきりしました。かくして返還後の沖縄に事前協議制が全面的に適用されますので、い

わゆる「自由使用」「自由発進」などは全くなりません。ここにいう「関連取決め」とは安保条約とともに国会の承認をえている条約第6条の実施に関する交換公文、すなわち事前協議の取決めとか、吉田・アチソン交換公文等に関する交換公文、相互防衛援助協定に関する交換公文及び地位協定をさすのであります。これに関連して、総理は極東諸国の安全は日本の重大な関心事であるとの日本政府の認識を明らかにした上、かかる認識に照らせば、本土並みの態様による沖縄の返還は、米国が極東諸国の防衛のために負っている国際義務の効果的遂行の妨げとなるようなものではない旨の見解を表明し、大統領が同意見の旨述べております。このことは当然ながら個々の具体的事態につき事前協議の際の許諾をあらかじめ予約したり保証したことではございません。

なお、地位協定の適用により、沖縄の米軍は本土と全く同様の立場におかれることとなります。従って沖縄の基地問題及びいわゆる「人権問題」ははじめて本土と同じ立場に立って処理されることとなり、沖縄県民の権利が十二分に守られることとなります。また、基地の整理統合についても、地位協定により本土同様に合理的に対処しうることとなります。

以上を通じて、沖縄の返還は本土並みであり、沖縄が本土と差別されないことが明らかであります。

#### 8. (核問題——第8項)

この項も共同声明の柱の一つであって、総理がわが国の非核三原則に基づく政策を詳しく述べ、これに対し大統領は深い理解を示し、この日本政府の政策に反しないように沖縄の返還を実施する旨を確約しております。すなわち、沖縄の核抜き返還が明らかにされたものであります。すなわち、米政府の最高責任者である大統領の「確約」であるからには、返還時における核兵器の撤去についてこれ以上の明確な保証はないのであります。従って返還後の沖縄にひそかに核兵器を存置しておくというような、いわゆる「核隠し」などは到底問題となりえないことは、私から事新しく申上げるまでもありません。なお、事前協議制度のもとでは、核兵器の日本(本土及び返還後の沖縄)への導入は法的に禁止されるということではなく、ただ日本政府は現在その政策たる非核三原則により、これを断るという方針をとっています。従って事前協議の対象となるべき性質の問題であることは変わらず、米政府の立場としてこれを確認したのが、「事前協議制度に関する米政府の立場を害することなく」との表現であって、これによってわが方が「有事持込み」を認めるという保証を与えたものではありません。

9. (財政経済問題——第9項)

この項は、沖縄の返還に伴い現地米国資産の対日移転、通貨の交換、現地米国企業の事業活動の取扱等に関するものであります。その詳細はまだ明らかではありませんが、返還協定交渉の一環として日米間で具体的に話し合われることとなる旨を述べています。なお、私としては、現在沖縄で正当に従事している米国の企業等についても、復帰に際し衡平に取扱うことが必要であると考えており、そのような考え方は米国にも十分伝えてあります。

10. (復帰準備——第10項)

戦後四半世紀にわたって法律、政治、経済、社会等あらゆる分野で日本本土と異なった諸制度のもとにおかれてきた沖縄の復帰に当って、県民の生活に無用の摩擦と混乱を起さないことは最も大切であります。このためすでに政府は格差是正を含む一体化政策によって多くの措置をとってきましたが、いよいよ復帰が実現するこの段階においては、一層周到、かつ、十分にその準備を進め、万全を期すとともに、沖縄県民の民生福祉の一層の増進につとむべきであることは当然であります。他方、復帰実現の日までは米国は依然として沖縄の施政の責任を負っているのであります。このため両首脳は復帰準備に当って、日米両国が緊密に協議し協力することに一致し、東京の既存の日米協議委員会がその全般的責任を負うとともに、現地において新に準備委員会を設置することに意見が一致しました。この委員会は従来の日米琉球諮問委員会と異なり、日米両政府の現地での最高級代表者たる大使級の代表及び高等弁務官をもって構成され、かつ、全く対等に協議、調整することとなりますが、沖縄県民の意思が十分に反映されるため、琉球政府行政主席が顧問として参加する道が開けております。政府はこの委員会がなるべく早く発足して活動できるよう、その権限等の具体的事項を含め、必要な国内及び外交上の手続をとるつもりであります。準備作業は沖縄県の再建、その他中央、地方行政の整備、基地問題、いわゆる人権問題等の解決を可能にする地位協定の適用、法律・経済・財政その他あらゆる制度の本土との統一化等々万般にわたっての準備を含みます。政府は、この間施政権者たる米国と十分に意思を疏通しつつ、政府の現地の出先が琉球政府、その他沖縄県民側と協力して、総理のいう「豊かな沖縄県造り」の基礎として行けるようにする所存であります。

なお国政参加については、すでに昨年日米間で原則的合意に達しており、この共同声明に特に言及されておりませんが、復帰までの大事な時期に当って、一日も早く実現されるべきことは言うまでもなく、私としても、このため国内措置が速かにとられることを希望しております。

11. (沖縄返還の意義——第11項)

第11項は、沖縄返還の意義をうたったものでありまして、特に説明を要しないと思えます。

12. (経済——第12項)

この項では、日米間の大きな問題となっている貿易及び資本の自由化についての両首脳の考え方が記されています。この点を少しく補足して申し上げますとつぎのようになります。

まず、日米貿易は、昨年は海洋をはさんだ二国間貿易としては史上最大の70億ドルに達し、資本と技術の交流も増大しておりますが、このような日米経済関係の成長と緊密化が前提となっております。

また、米国と日本は国民総生産において自由世界の一位と二位を占めていることに象徴されますように、両国は世界経済において重要な地位を占めており、このことから国際貿易通貨体制の強化に関する双方の責任が確認されたわけでありまして、

これに関連して米国のインフレ抑制の決意が再確認されました。また米国の自由貿易堅持の姿勢が再確認されたことは喜ばしいことであります。すなわち、戦後の自由、かつ、開放された国際経済体制を創設し、この体制を維持、強化して行く上で常に原動力となってきた米国の自由貿易政策を今後とも維持することを明らかにしたことは、世界経済の発展にとっても、わが国経済の拡大にとってもきわめて重要なことであります。

わが国は従来から貿易及び資本の自由化を推進してきておりますが、国際社会の一員としての責任を果すとの観点からも、今後ともこの努力を続けて行くとの決意を表明致しました。貿易の自由化については、去る10月の関係閣僚協議会の決定を再確認し、さらに、貿易の自由化を促進するとの見地から、今後とも自由化計画の検討を続けてゆく旨明らかにしました。

以上のことは、日本政府が従来とってきた政策の基本方針にそうものでありまして、沖縄返還と経済問題とを取引したということでないことは言うまでもありません。

13. (援助問題——第13項)

この項で、両首脳は、開発途上国の経済開発は、先進国と開発途上国との共同の努力により進められるべきものであって、いわゆる南北問題の解決なしには国際平和と安定はありえない、日米両国ともこういう共通の認識に立って、開発援助に取り組もうということで、まず意見が一致しました。

さらにアジアに対して、わが国経済の成長に応じ、経済援助の量を拡大

し、その内容を改善して行く意向であることは政府としてすでに繰返し述べているところであり、総理はこのようなわが国の意向を大統領に対してあらためて表明したわけであり、

他方、大統領は、米国のとしてもこれまでアジアに対しては積極的に援助を行ってきたが、今後もこれを続けて行く考えであることを確認し、今後とも両国がアジアの経済開発をできるだけ助けて行くことになりました。

特に、ベトナム戦争後においてベトナムその他の東南アジアの地域の復興開発をはかることが極めて必要であることを認め、日本としても、これに対する協力を惜しまないことを明らかにしました。

#### 14. (宇宙協力—第14項)

総理は目下行なわれているアポロ十二号の壮挙につきお祝いと成功への期待を述べるとともに、科学の新しい分野であると同時に国際協力の重要な新分野となりつつある平和目的のための宇宙開発について、国際協力の推進は世界平和の推進につながるものであるとの共通の認識に基づき、大統領と意見の一致をみたのであります。

日米宇宙協力協定は、直接的にはわが国の宇宙開発計画の実施を容易にすることを目的にしますが、これにとどまらず、このような積極的な面における日米間の協力が行なわれることにより、日米友好関係を一層増進することに意義があります。

#### 15. (軍縮—第15項)

「軍備管理」とは、軍備の質、量、開発、展開、使用などを含む軍備政策になんらかの規制を行なうことであり、核実験の停止とか核兵器の海底設置禁止がその中に入り、「軍拡競争の抑制」とは軍拡のスピードを相互に落とそうというもので、米ソのヘルシンキ交渉はこれに入ります。わが国としても、この交渉の成功を強く望んでいますが、単なる軍備制限では満足できず、全面完全軍縮を目標として、効果的な軍縮措置（たとえば化学細菌兵器の禁止、核兵器の制限）を進めることに強い関心を持っている旨総理が述べたのであります。

## 第2部 佐藤総理大臣の演説、 ステートメントおよび挨拶等

### I. ダレス空港到着の際のステートメント

(昭和44年11月17日)

本日ここに日本国の総理大臣として三度ワシントンを訪ねることができ、私の大きなよろこびとするところであります。

1970年代を迎えようとするこの時期に当って、日米両国間の協力体制も新たな発展段階に入ろうとしております。私は今次米米訪問に際して、ニクソン大統領はじめ米米政府首脳の方々との間に率直な話し合いを行なって、沖縄問題をはじめ諸問題の解決を計るとともに、長期的見地に立って、日米信頼関係の強固な基礎を築きたいと念願するものであります。

今回の訪問が実り多きものであることを期待し、御挨拶いたします。

(Translation)

#### Statement by Prime Minister Eisaku Sato on Arrival at Dulles Airport

November 17, 1969

It is with great pleasure that I have come to Washington today for the third time as the Prime Minister of Japan.

Now, on the eve of the 1970s, we find the cooperative relations between Japan and the United States about to enter a new phase of development. I earnestly desire to find a solution to the Okinawa and other problems and lay a firm foundation, from a long-term point of view, for a relationship of mutual trust between our two countries, through a frank exchange of views with President Nixon and other leaders of the United States Government in the course of my current visit to this country.

I am confident that my present visit will prove fruitful.

## II. ホワイト・ハウス歓迎式における挨拶

(昭和44年11月19日)

大統領閣下、令夫人、御列席の皆様

歴代合衆国大統領の中で、六回も日本を訪問され、日本のありのままの姿をもっともよく理解されているニクソン大統領閣下を、ここホワイト・ハウスに訪問する機会をえましては、私の心から喜びとするところであります。

ときあたかも、アポロ12号が11号に続いて月面到着に成功した直後であり、この壇上から大統領閣下をはじめ、米国民の皆様には深甚なる敬意を表するとともに、お祝いの言葉を申し述べることは、欣快の至りであります。

日米関係は、近來とみに緊密さを増しつつありますが、私は、今回の大統領閣下との会談を通じて、両国の信頼と友好関係を、さらに一層強固なものにしたいと念願しております。

すでに御承知のように、私のこの度の訪問は、日米間の最大の懸案である沖縄問題を解決し、これによって1970年代の新しい日米関係の基を築くことにあります。私は、日米両国民がその固い信頼と友好のきずなにより、この問題について相互に納得の行く解決に到達しうるほど堅く結び合わされていると信じて疑いません。

また流動する国際情勢の中にあつて、世界の平和と安定の維持のために、日米の協力関係はますます重要となつてきておりますが、特に、発展途上国の多いアジアにおいては、その経済的自立と民生安定のために、両国は、それぞれ協調しつつ独自の役割を果すことを期待されております。私はこの機会に大統領閣下はじめ米政府の指導者と両国が共通の関心を有する諸般の問題について隔意なき意見の交換を行ないたいと思います。

やがて1970年代を迎えんとするこの時に当り、社会体制を同じくし、共通の価値観を有する両国間の話し合いは、必ずや世界の平和と発展にとって十分な成果をもたらすことを確信するものであります。

ありがとうございました。

(Translation)

## Remarks by Prime Minister Eisaku Sato at the White House Welcoming Ceremony

November 19, 1969

Mr. President, Mrs. Nixon,  
Distinguished Guests, Ladies and Gentlemen:

I am deeply touched by your kind words, Mr. President. Having visited Japan six times, you understand our country as she really is better than any other American President, and I am heartily delighted to have this opportunity to call on you at the White House.

The timing is perfect for me. I am grateful for my good fortune to be able to stand on this platform right after the successful landing on the moon of Apollo 12, which has so closely followed the historic feat of Apollo 11, and express my profound respect and heartfelt congratulations to you and to the people of the United States.

The relations between Japan and the United States are becoming increasingly closer in recent years, and it is my earnest desire to strengthen further the relationship of mutual trust and friendship between our two countries through my talks with you.

The purpose of my present visit here is, as you already know, to solve the Okinawa problem, the biggest issue pending between Japan and the United States, and thereby lay a foundation for the new Japanese-American relations of the 1970s. I am convinced that the ties of mutual trust and friendship binding the peoples of our two countries are strong enough to make it possible for us to reach a mutually satisfactory solution to this problem.

Cooperative relations between Japan and the United States are assuming ever greater importance for the maintenance of world peace and stability in the fluid international situation. Especially in Asia, where there are a number of developing countries, our two countries are expected to play a role of their own in concert with each other for the economic independence and stabilization of



people's livelihood of these countries. I would like to take this opportunity to have an unreserved exchange of views on various matters of common interest to our two countries with you, Mr. President, and with other leaders of your administration.

I am confident that the talks between our two countries, with a similar social system and a common conception of values, at this time when we are about to greet the 1970s, will bring about a substantial effect upon the peace and progress of the world.

Thank you.

### III. ロジャーズ国務長官主催午餐会におけるトースト

(昭和44年11月19日)

国務長官閣下並びに御列席の各位

私は今回の訪米にあたり、ニクソン大統領閣下をはじめ、米政府の首脳者と有意義な話し合いを行っており、またこの話し合いによって、当面の日米間の最重要課題である沖縄問題が、まさに妥結の段階に到達せんとしておりますが、これもひとえに国務長官閣下の懇篤な御配慮と御協力の賜物であり、深甚なる謝意を表すものであります。

私は、本年夏日米貿易経済合同委員会が東京で開かれた際、はじめてお目にかかる機会をえたのでありますが、貴長官がかねてから国際間に共通の広場があることを指摘しておられることに、深く共鳴しているものであります。

文化的背景、歴史的体験、社会的慣習の違う国の間にも共通の広場があり、相互に依存しあっているという閣下の御認識は、国際間の緊張を緩和し、平和共存関係を達成しようとする米政府の基本姿勢を示すものであり、私も全く同感であります。日米の友好と信頼関係がさらに新しい発展の段階を迎えんとするとき、閣下の御建在は、われわれにとっても力強いかぎりであり、

ここに国務長官閣下並びに米側関係者各位の御健康と一層の御活躍を願って、杯を上げたいと存じます。

ありがとうございました。

( 36 )

(Translation)

### Toast by Prime Minister Eisaku Sato at the Luncheon Given by Secretary of State Rogers

November 19, 1969

Mr. Secretary, Distinguished Guests, Gentlemen:

Thank you very much, Mr. Secretary, for your warm words of welcome.

Up to now, I have been having rewarding discussions with President Nixon and other leaders of your Government. Through these discussions, the Okinawa problem, the most important issue before our two countries, is about to reach a settlement. We owe it entirely to your kind consideration and cooperation, Mr. Secretary, and I wish to express my deepest gratitude to you.

I had the pleasure of meeting you for the first time when the Joint Japan-United States Committee on Trade and Economic Affairs was held in Tokyo last summer, and I am in full agreement with the view you have often expressed that there exists a common ground among the nations of the world.

Your concept that the countries with different cultural backgrounds, historic experiences and social usage have a common ground and are dependent upon each other indicates the basic attitude of the United States Government to ease international tensions and to establish relations of peaceful co-existence, and I fully share it. It is reassuring to us to have you as Secretary of State at this time when our relations of friendship and trust are about to enter a new phase of development.

I now ask you all to join me in a toast to the continued good health and success of the Secretary of State and our American friends.

Thank you very much.

( 37 )

#### IV. ニクソン大統領夫妻主催晩餐会における挨拶

(昭和44年11月19日)

大統領閣下、令夫人並びに御列席の皆様

本日、私どものためにかくも暖かく御丁寧なおもてなしをいただきましたことに、厚く御礼申し上げます。

私はまず、アポロ12号の月面到着を衷心からお祝いいたしたいと存じます。すでにお聞き及びとは思いますが、アポロ11号の月面到着に当って、日本国民の熱狂ぶりは相当なものでありました。老若男女を問わず、事情の許すかぎり一億の日本国民のほとんどが一日中テレビジョンの前にかじりついて、宇宙飛行士の月面における活躍ぶりを手に汗を握り、ニクソン大統領が太平洋上において帰還した三飛行士を出迎えられる姿をみて、その喜びをともにしたのであります。日本国民は、神秘的な月の世界が人類の目にふれたことに感激し、米国のこの分野における成功に心からなる拍手を送りました。日本国民は、そこに新しい宇宙時代の始まりを実感として持ち、人間社会の発展をまざまざと予想することができたのであります。

米国は、この計画によって、世界各国の国民の胸に直接語りかけ、人類の連帯意識を生み出したといえるのであります。これは、米国の組織力の勝利であると同時に、米国民の想像力と勇気の勝利であると思っております。私はつい先日、日本を訪問中の三人の宇宙飛行士とお会いし、親しくその体験談を聞く機会を持ったのでありますが、奇しくも私のワシントン滞在中にアポロ12号による月面到着をみたことは、私にとっても心から喜びに耐えないのであります。

大統領閣下、日米関係が新たな発展を遂げんとしているこの時期に、戦後六度も来日され、日本の実情について深い理解を持っておられる閣下が米国の最高指導者の地位におられることは、日米関係の発展のためにきわめて心強いことであると私どもは感じているのであります。

また私は、閣下が故アイゼンハワー大統領の副大統領として日本を訪問されたとき、はじめてお目にかかったのでありますが、爾来、閣下と故大統領との間柄を、自分と故吉田茂先生との関係になぞらえ、人一倍親近感を抱いていたことを、ここに卒直に御披露する次第であります。

近時日本は着実な経済成長と技術革新とによって、国力に一層の充実をみるに至りました。今日までの発展は、多年にわたる国民の勤勉のたまものにはかたまりませんが、同時に、これは幾多の先人の努力による日米間の緊密な協力関係に負うところが甚だ大きいのであります。

一方、現在の世界が当面している困難は数多く、かつ、根深いものがあり

( 38 )

ます。かかる時期に、米国大統領としての職責を遂行される大統領閣下の御苦心ははかり知れないものがあろうかと思えます。大統領閣下がこれまで数多くの困難に遭遇された際、常に鉄の意志をもってこれを克服され、ついに栄ある今日の地位につかれたこと、不屈の政治家魂とでもいべき閣下の信念に、敬意を払わない者はありません。またそのかげには、絶えずニクソン夫人の温かい内助の功があったと聞き及んでおります。

不動の信念とたゆまざる向上心、これこそ今日の世界がもっとも必要とするものであります。閣下の卓越した指導力とアポロ計画に象徴される米国民の英知と行動力が結合するならば、必ずや国際間の緊張も緩和し、人類の進歩を促進することと信じます。

わが国もまた、日米間の信頼関係を確立し、それを基礎として、相応の国際的責任と役割りを果たして行く決意であります。

今後とも、米国がニクソン大統領閣下の指導の下に世界文明の先駆者としてますます発展を遂げられんことを期待し、ここに、大統領閣下の御健康と一層の御成功のために、そしてまた、末永き日米の信頼友好関係のために乾杯いたしたいと存じます。

(Translation)

Remarks by Prime Minister Eisaku Sato at a Dinner  
in His Honor Given by the President and Mrs. Nixon

November 19, 1969

Mr. President, Mrs. Nixon,  
Vice President Agnew, Mrs. Agnew,  
distinguished guests, ladies and gentlemen:

I wish to express my deep appreciation to you, Mr. President, for this warm and cordial reception extended to us this evening.

First, I should like to take this opportunity to offer you my heartiest congratulations on the successful landing on the moon of the Apollo 12 spacecraft. As you may have already heard, the Japanese people were greatly excited by the lunar landing of the Apollo 11 spacecraft. Almost all of the one hundred million Japanese people, young and old, men and women, were glued to their television sets the whole time, as long as they could, watching the

( 39 )

astronauts' activities on the moon with breathless suspense. They shared a feeling of great joy, when they saw you, Mr. President, smiling a welcome to the three astronauts upon their return on the Pacific. They were fascinated by the revelation to human sight of the mysterious lunar world, and whole-heartedly applauded the United States success. This event gave the Japanese people the opportunity to witness the advent of the space age as a personal experience and to be able to imagine in all its vividness the future development of human society.

It can be said that the United States has created a sense of solidarity among mankind by appealing directly to the hearts of the peoples of various countries in the world through this project. In my opinion, this is not only the victory of the superb power of organization of the United States, but also the victory of the imagination and courage of the American people. Only a short time ago, when they visited Japan, I had the opportunity of hearing in person from the three astronauts the story of their experiences. It therefore gives me special pleasure to be informed of the successful landing on the moon of Apollo 12 during my stay in Washington.

Mr. President, at this time when United States-Japan relations are about to make a new development, we have found it extremely heartening to have you as the highest leader of the United States, especially since you have visited Japan as many as six times after the war and have such a deep understanding of the actual state of our country.

I had the pleasure of first meeting you, Mr. President, when you came to Japan in your capacity as Vice President under the Administration of the late President Eisenhower. Please allow me to confess here frankly that since then, I have always had a sense of special closeness to you, by drawing an analogy between your relations with the late President and my own relations with the late Prime Minister Shigeru Yoshida.

In recent years, Japan's national strength has been greatly enhanced through steady economic growth and technological innovation. Our development up to the present time represents the

fruits of the Japanese people's many years of diligent effort, but, at the same time, it owes a great deal to the close cooperation between our two countries which many of our predecessors have done so much to promote.

On the other hand, the difficulties confronting the present world are numerous and deep-rooted. I feel, Mr. President, that the amount of painstaking effort you expend in carrying out your responsibilities as the President of the United States cannot be measured. No person can help respecting you for your faith, your indomitable statesman's spirit, so to speak, in overcoming the many difficulties you have faced by exercising your firm will, and in finally reaching your present exalted position. We have also heard that behind your successes, there has always been the warm presence of Mrs. Nixon.

Unshakable faith and untiring aspiration; these are the two qualities of which the present world is in the utmost need. I am convinced that your excellent leadership combined with the wisdom and power of action of the American people as symbolized in the Apollo Project, will not fail to contribute to the reduction of international tensions, and to the enhancement of the progress of mankind.

We are also firmly determined to establish a relationship of mutual trust between the United States and Japan, and on this foundation, to carry out such international responsibilities and roles as would be commensurate with our national strength.

It is my sincere hope that, under the leadership of President Nixon, the United States will continue to achieve even higher development as the vanguard of world civilization. Ladies and gentlemen, I wish now to ask you all to join me in a toast to the good health and further success of the President and Mrs. Nixon as well as to the everlasting friendship and mutual trust between the United States and Japan.

V. ホワイト・ハウス出発式における挨拶

(昭和44年11月21日)

私は、ニクソン大統領閣下をはじめ米国政府首脳者との三日間にわたる会談を成功裡に終え、本日午後ワシントンに別れを告げることになりました。

終始打ちとけたふん囲気の中で、日米間の信頼と友好関係のきずなを強化することができたことは、私にとって何物にもまさる喜びであります。

現在の国際社会において、われわれはなお多くの困難な課題に直面しておりますが、相互理解と協力の精神の下に、ともに前途に希望をもって努力を続けられ、自ずと道は開かれるものと確信します。

特に今回の会談において、沖縄の返還につき合意が成立したことは、歴史的に重要な出来事です。私は、帰国の上は、今回の訪問の成果に基づき、日米間に新しい関係を樹立し、世界の平和の確立に資すべく渾身の努力を払う所存であります。

お別れにあたり、ニクソン大統領御夫妻をはじめ、米国政府並びに国民の皆様への暖い御配慮に対し、厚く御礼申し上げ、あわせて皆様方の御健康と御繁栄をお祈りいたします。

(Translation)

Remarks by Prime Minister Eisaku Sato  
on Departure from the White House

November 21, 1969

I am leaving Washington this afternoon after having successfully completed three days of talks with President Nixon and other leaders of the United States Government.

It gave me the greatest pleasure to have been able to strengthen the ties of mutual trust and friendship between the United States and Japan in such an openhearted atmosphere as prevailed throughout our meetings.

Although we still face a number of difficult problems in the present international society, I firmly believe that the paths we have to tread will open up by themselves if we both continue our efforts with hope in the future and in the spirit of mutual under-

standing and co-operation.

In particular, it is an event of historic significance that an agreement has been reached on the reversion of Okinawa through our talks.

On my return to Japan, I am determined to make every possible effort to set up new relations between the United States and Japan based on the accomplishments of this visit which would also contribute toward the establishment of world peace.

As I take my leave, may I express to President and Mrs. Nixon, as well as to the Government and the people of the United States, my heartfelt gratitude for your warm solicitude, and my best wishes for the good health and continued prosperity of you all.

VI. ホテル・ワシントンにおける邦人記者会見冒頭発言

(昭和44年11月21日)

1. (沖縄返還の意義)

只今終了した三日間にわたるニクソン大統領との会談を通じて、沖縄が1972年中にわが国に返還されることに基本的な合意をみたことをまず国民の皆様へ御報告いたします。

沖縄の祖国復帰は、サン・フランシスコ平和会議以来のわが国政府、国民をあげての努力が結実したものであり、感慨無量であります。これも一重に沖縄県民の皆様をはじめとする全国民の強い御支援の賜物と深く感謝いたします。

また、私は、日本国民の多年の宿願にこたえて、沖縄を日本に返還するとの歴史的決断をされたニクソン大統領並びに米国民に対し、衷心から敬意と感謝の意を表したいと思っております。

戦争で失った領土を話し合いを通じて回復することは、世界史上たぐい稀なことです。これを可能にしたものは、日米両国間の強い友好信頼関係であります。また、その背景には自由を守り、平和に徹する日本国民に対する友邦米国の理解と適切な評価があったと信じます。

私は、これにより日米友好関係はかつてないほど固い磐石の基礎の上におかれ、1970年代及びその後永きにわたりアジア、太平洋地域をはじめ全世界にわたって、友好と信頼を基調として相協力することとなると確信します。

## 2. (合意の内容)

今回、私とニクソン大統領の間で合意した沖縄返還の大綱は、1972年中に沖縄が、核兵器の全く存在しない形でわが国に返還され、返還後の沖縄には、日米安保条約及びその関連取極が、そのまま本土における全く同様に適用され、事前協議についても、なんら特別の例外を設けないということでもあります。これはまさに政府の対米交渉の原則がすべて貫かれたことを意味します。核兵器についてのコミュニケの表現は、これら兵器の撤去を意味しております。また1972年中の返還は、復帰によって沖縄県民の生活に混乱を起さないよう、施政権の移転が円滑に実現する最少限の準備期間を確保するとの考慮に出たもので、実質的には「即時返還」と同じであります。なお返還に当ってなんら特別の条件はついていないこともはっきりしております。

返還後沖縄の米軍基地は安保条約による施設・区域となり、米軍の兵員は地位協定により本土における全く同様の立場におかれます。而してこれら基地の極東における戦争防止機能が引続き有効に維持されることが、わが国の国益にとってきわめて重要なことは申すまでもありません。私とニクソン大統領は、この機会に日米安保条約の堅持の意図を相互に明らかにしましたが同条約の運用に当って、極東の平和と安全なくしては、わが国の安全も十全を期しえないとの認識に立つことが必要であります。

特に韓国に対する武力攻撃が万一発生すれば、これはわが国の安全に重大な影響を及ぼすものであり、事前協議が行なわれる場合には、このような認識の下に政府の態度を決定することが、わが国の国益に合致する所以であると考えます。また、台湾地域に対する武力攻撃発生という事態は、わが国を含む極東の平和と安全を脅かすこととなるので、わが国としてはこのことを十分認識しておく必要がありますが、幸いにしてかかる事態は予見されないものであります。

## 3. (復帰準備)

いよいよこれから米国政府との間に施政権返還協定締結のための交渉に入るとともに、本土と沖縄の双方において沖縄の本土復帰のための準備に着手するわけであります。私は、これらを通じて沖縄県民の民意が十分反映されなくてはならず、そのためにはすでに米国との間に合意済みの国政参加を早急に実現することが必要と考えております。また施政権返還前における復帰準備については、米国政府との十分な協力が必要であり、今回、復帰準備に関する日米協力のための機構の新設・整備につき意見の一致をみたものこの見地にたったものであります。

復帰準備は、将来の沖縄県造りの第一歩であります。私は沖縄県民の

民生福祉の向上、沖縄経済の振興を通じて、「豊かな沖縄県」を造ることを目標に、政府を挙げて努力する決意であります。このために沖縄県民はもとより、本土国民各位の御協力をお願いする次第であります。

## VII. ナショナル・プレス・クラブにおける演説

(昭和44年11月21日)

ヘッファーナン会長並びに御列席の各位、私がこのクラブで皆様にお話しするのは、今回で三回目であります。見渡せば、親しい御顔の方々も大分拝見されます。とくに今回、ニクソン大統領と私の会談によって生まれた、太平洋新時代ともいふべき新しい日米関係と国際政治の新展開についてお話し申し上げる機会を与えられたことは、私の心からなる喜びであるとともに光栄とするところであります。

申すまでもなく、日本にとって米国との関係は、他のいかなる国との関係にもまして重要であります。同時に、私は日本との友好信頼関係が米国にとってきわめて重要であることは勿論のこと、アジア太平洋地域の平和と安定のためにはこのような日米間の友好信頼関係が維持増進されることが不可欠の要件であることを確信いたします。かかるときに、過去六回も訪日されるという、歴代米国大統領中最もよく日本を知っておられる、しかも私の旧知のニクソン大統領と親しく御話し出来たことはまことに喜びにたえません。

私は、ニクソン大統領との会談において、両国間の関係のみならず広く国際政治全般について卒直な意見の交換をいたしました。その成果は、きわめて満足すべきものでありましたが、成果の最大のものは、申すまでもなく沖縄問題の解決であります。沖縄問題は、戦後の日米間の最大の懸案であったことは御承知のとおりであります。今回ついに私とニクソン大統領の間で沖縄を1972年中に日本に返還することについて基本的な合意をみるに至りました。合意の内容は、コミュニケで明らかにされたとおりであります。

そもそも、戦争の結果発生した領土の状態を、平和裡の話し合いによって双方が満足する形で変更したということは、世界史上たぐいまれなことであります。日米両国は沖縄返還問題をかように解決したことによって、時代の進展に応じた国際問題処理の新しい方式を示し、およそ国交関係なるものに、友好と信頼を基礎とした新しい秩序と、真の平和のあり方を開拓したといえるのではないのでしょうか。私は、沖縄問題の解決によって1970年代にはじまる世界の未来のために、日米両国が永続的な相互協力を行うための磐石の基礎を固めることができたと確信するものであります。

そこでこの際特に強調しておきたいことがあります。それは、このような歴史的な交渉を可能ならしめた背景はなんであったかということと、沖縄返還が今後の日米関係をどのように形づくり、さらには1970年以降の国際政治にどのように影響して行くであろうかということとであります。

戦後1953年には、奄美群島が、1968年に小笠原諸島がそれぞれ日米両政府間の話し合いによって返還されております。しかし、百万人の日本人が住む沖縄は、極東における平和維持の戦略的拠点として今日まで米国の施政権下におかれてきました。日米間の返還交渉における最大の問題は、まさしく沖縄が平和維持の面で果たしている役割りそのものにあったのであります。沖縄における米軍基地の重要性について日米間の基本的な認識は一致しております。沖縄基地の平和維持機能は、今後とも有効に保たれなければなりません。しかしながら、わが国の領土たる沖縄と、そこに住む百万の日本人が戦後引き続き米国の施政権下に置かれるという事実は、日本国民の心の中に割り切れないものを残し、いわば敗戦の象徴として意識され、それがしこりとなって、日米関係に微妙な影響を及ぼしておりました。

私とニクソン大統領は、日米両国民間の友好と信頼を維持増進し、戦後二十余年間に亘って、相互の利益のみならず共通の理念によって徐々に築かれていったパートナーシップの関係をこの際一段と強化することこそ相互の国益に沿う所以であり、同時に、アジアの平和と発展に寄与するという認識の下に、沖縄返還について合意したのであります。換言すれば、自由平等、人権の尊重、社会正義の実現などの民主主義の諸基本的理念において日米に一致するところがあったからこそ、沖縄返還が実現したのであります。私は、この交渉を通じ米政府・議会など関係者がわれわれに示された信頼と寛容に対し、さらには米国民の友好と善意に対し、深い感謝の意を表するとともに、日米間のきずなの強さをいっそう痛感したのであります。ひるがえって、同じ第二次大戦の結果きりはなされた北方領土がいまだ祖国に復帰していないことはまことに遺憾であります。私は、沖縄の輝かしい先例に勇気づけられながら、日本国民の正当な要求を平和裡に実現すべく、ひきつづき努力する決意であります。

さて、沖縄の復帰に伴いわが国が沖縄の局地防衛の責務を徐々に負って行くことは当然であります。日本の自衛力はすでにわが国の第一次防衛を保障する上で重要な役割りを果たしておりますが、今後とも逐次整備して行く方針であります。私としましては、米国の自由諸国の期待にこたえ、ニクソン大統領がグアム島で明らかにされたように、アジアにおける戦争抑止の機能はひきつづき維持することを期待し、かつ確信するものであります。

この点に関し、私と大統領は、日米安保条約を堅持して行くことをお互い

に確認いたしました。日本が、この条約を堅持する第一の目的は、いうまでもなく、わが国の力の足らざるところを友邦米国の協力によって補い、もって、自国の安全を確保するためであります。しかし乍ら、現実の国際社会においてわが国の安全は、極東における国際の平和と安全なくしては十分に維持することができないのであります。ここに広く極東の安全のために米軍が日本国内の施設・区域を使用するという形での日米協力という安保条約の第二の目的が浮び上ってまいります。私が、この施設・区域の使用に関する事前協議について、日本を含む極東の安全を確保するという見地に立って同意するか否かを定めることが、わが国の国益に合致するところであると考える所以もここにあります。

特に韓国に対する武力攻撃が発生するようなことがあれば、これは、わが国の安全に重大な影響を及ぼすものであります。従って、万一韓国に対し武力攻撃が発生し、これに対処するため米軍が日本国内の施設・区域を戦闘作戦行動の発進基地として使用しなければならないような事態が生じた場合には、日本政府としては、このような認識に立って、事前協議に対し前向きにかつすみやかに態度を決定する方針であります。

台湾地域での平和の維持もわが国の安全にとり重要な要素であります。私は、この点で米国の中華民国に対する条約上の義務遂行の決意を十分に評価しているものであります。万が一外部からの武力攻撃に対して、現実に義務が発動されなくてはならない事態が不幸にして生ずるとすれば、そのような事態は、わが国を含む極東の平和と安全を脅かすものになると考えられます。従って、米国の台湾防衛義務の履行というようなこととなれば、われわれとしては、わが国益上、さきに述べたような認識をふまえて対処して行くべきものと考えますが、幸いにしてそのような事態は予見されないのであります。

私はインドシナ半島に一日も早く平和が取り戻され、この地域の諸国民が再び安定と繁栄をめざして働きうようになることを、祈るとともに、日本としていかにしてこれに協力すべきか、その役割りを真剣に探求している次第であります。私としましては、日本の果たすべき役割りは、インドシナ半島の経済の復興、発展のため協力することは勿論のこと、戦火の収まった後に設けられるべき国際的平和維持機構にも求められれば日本の国情に合致した方法で参加、協力すべきものと考えております。私は、南ヴェトナム人民が外部からの干渉なしに、自主的にその運命を決定することができるようにとの目的のために米国が払っている犠牲と、ヴェトナム問題やラオス問題の平和的、かつ、正当な解決のためにニクソン大統領はじめ米側関係者が払われている誠実な努力に敬意を表するものであります。と同時に、私

は米国の立場に、深い理解を抱き、その努力が実を結ぶことを心から期待しています。

私は、冒頭に、太平洋新時代ということをし上げました。それは、沖縄返還によって名実ともに戦後の時代に終止符を打ち、日本が米国と協力してアジア・太平洋地域、ひいては全世界の平和と繁栄に貢献して行く時代であります。そしてまた、それは、日米両国間に生じた問題の解決に限られたいわば「閉ざされた日米関係」から、日米両国が協同して国際協調の強化に努める「開かれた日米関係」への移行といってもよいのであります。

このためには、1970年代の展望がまず必要であります。私は、70年代は米ソ両国が世界平和の維持に第一義的な能力と責任を負いつつも、他の各国がそれぞれの目標に従い自主的な行動の範囲を拡げて行った60年代の姿が大きく変わるものではないと考えております。

ということは、まず第一にわれわれが米ソ両大国に対して抱く期待は極めて大きいということを意味するものであります。即ち、米ソ両国が世界平和の維持のため、緊張のより一層の緩和、中東に見られるような地域紛争の平和的解決、さらには各種軍備管理措置の実現といったような諸課題に、60年代にもまさる努力を払うことが必要だということであり、この意味において、日本国民は今般開始の運びとなりました両大国間の戦略兵器縮減交渉が実を結び、将来の一般的な軍縮の出発点となることを強く念願しているのであります。

70年代は、また、米ソに次ぐ諸大国が夫々より大きい責任を果すべき時代でもあると申せましょう。ことにわれわれは、目下核戦力の開発に努力している中共の将来、及び米国と中共との関係、ソ連と中共との関係に深甚の関心を抱くものであり、米中ソ三国を隣国としている日本としては米ソ間において平和維持の努力が進展しているのと同様に、70年代において、米中、ソ中間にも平和的な共在関係が実現されんことを強く希望するものであります。またわたたくしは、中共が従来の硬い姿勢を改めて、世界平和の実現のための責任を建設的に果す国として国際社会に参加することを期待しており、日米両国はこのための門戸を、中共に対し常に開放しておくべきものと考えております。

70年代における日本、あるいは西ヨーロッパの諸国の責任もまた大なるものがあると考えます。これら諸国が緊張緩和、あるいは世界経済の調和ある発展のために果しうる役割りは今後さらに増大すると予想されます。なかんづく、南北問題は今後も長期にわたって人類が取組み、解決すべき最大の課題であることを思えば、これら先進工業諸国は短期的な利害を超え、力を合せて開発途上諸国の国造りの支援に一層力を致すべき必要を痛感するも

のであります。

このような展望に立って太平洋をはさむ二大雄邦たる日米両国が協力する時代、これが私のいう太平洋新時代なのであります。

さて、かかる日米協力のあり方ではありますが、まず日米二国間の関係について申し上げれば、沖縄問題の解決により、当面日米両国間の重要な問題の一つが経済問題であることは、明らかであります。現に日米二国間には資本取引にせよ貿易面にせよ種々の問題があり、すでに日米関係を円滑に進めて行くための当事者間の努力が行なわれておりますが、私はさらにこの点に関し一層の努力を払う所存であります。70年代においては二国間のみならず世界の他の地域においても、経済の分野で日米の協調と競争の両面がともに増大するものと予想されます。そこには若干の摩擦が起り勝ちであります。しかしながら、日米両国の巨大な貿易量にみられる相互依存関係の探りからくる利益の大きさに比べれば、競争のため、まゝ発生する摩擦は、それほど問題ではありません。より大切なことは、相手国の立場をつねに理解し、互恵互譲の精神により部分的な摩擦が、政治的な大きいつながりを傷つけることのないよう国際的ルールの枠内で配慮することであると考えます。この意味で、私は、以前から日本の貿易の自由化並びに資本の自由化を推進して参りました。

昨年12月、閣議決定を行ない「輸入制限品目について全面的再検討を早急に行ない、両三年中かなりの分野において自由化を実施する」ことにいたしました。さらにその後先月日本政府は、現存輸入制限品目を1971年末までに半減し、さらに、その他の品目の自由化の促進についても最大限の努力を払うことに決定致しました。また、資本の自由化については自由化業種の範囲の拡大についても努力を続けて参りました。しかし、この貿易及び資本の自由化の促進については、今後とも一層努力する決意であります。同時に、米国が今後とも安定した経済発展を続け、開放的な経済政策をとることを期待するものであります。

日米両国が共通の関心を持つアジアにおいては、各国の自助努力、共通の関心を有する国々との地域協力、先進国からの経済技術協力が相まって、次第に開発のテンポが早まり、多くの地域において安定した国家体制と自主的な経済建設の前進がみられます。それにもかかわらず、アジアの貧困は依然として解消されず、アジア諸国の持続的な発展の基礎が確立されたというには、まだほど遠い状態にあります。このようなアジアの情勢は、1970年代に入っても大きく変わることはないものと考えられます。

ここに私は、アジアの先進工業国としてのわが国に与えられた最大の課題を見出すのであります。すなわち、民族や宗教や文化を異にするアジアの諸

国が、自由と独立とを享有しつつ、相互に協力してともに繁栄するよう軍事的でない側面から協力することこそ、わが国が 1970 年代における国家目標として追求すべき課題であります。米国が全世界の平和の維持にとって中心的な存在であり、アジアにおいても安全保障の上で重要な責任を負っていることを考えれば、アジア諸国の国造りに対する経済、技術面での支援という分野においては、米国よりもむしろ日本の方が主体的な役割りを果たすべきであると考えます。

わが国は、自由世界第二位の経済力を有するに至ったとはいえ、米国との差はきわめて大きく、しかも一人当りの国民所得は、世界で二十番目であるという現実にあります。それに加えて、社会資本、公共投資の大きな不足を是正して行かなければならない重荷を背負っております。しかしながら、日本国民の心の底には、世界のために積極的に働きかけることに生き甲斐を見出したいという意欲もまた生まれているのであります。特に、沖繩問題の解決が日本国民に自信を与え、民族としての建設的意欲をアジアの安定に向けて指向せしめる契機となることは疑いを容れません。

すでにわが国は、1970 年代をアジア開発の 10 年とする目標を掲げておりますが、アジアの平和と繁栄の確保は、わが国一国の力だけで達成することはできません。アジア諸国の自主的な努力とともに、この地域に大きな関心を有する先進工業諸国の物心両面の協力が必要であります。何故なら新しいアジアの建設に当っては、単に貧困や飢がや疾病の除去といった物的な面のみではなく、アジア諸国民が自由と社会正義とを享受しうることをも目標にしなければならぬからであります。ここにもまた、共通の理念に結ばれた日米両国による秩序の創造という太平洋新時代のあるべき姿を見出すのであります。

日米の協力は、二国間及びアジアに限定されるものではありません。この協力は自由世界において 1 位と 2 位の経済力を有する 2 つの国の協力でありますから、その対象は、さきに 1970 年代の展望について述べたとおり、一般的緊張緩和、国連機能の強化、軍備管理、ひいては軍縮の実現、南北問題の解決、自由な貿易体制の維持、安定した国際通貨体制の確立など諸々の世界的諸問題に及ぶべきであります。

さて、このような広範な協力関係を作り上げるためには、いかなる心構えが必要でありましょうか。もっとも必要なことは、両国の国民の間の理解の促進と信頼感の育成であります。丁度今を去る 100 年前、40 名の日本人移民が初めて米国に渡ったのでありますが、今や毎年 10 万人を超える日本人が米国を訪問しており、米国から日本への訪問者も年間 20 万人を越えます。こうして直接あるいはマス・メディアを通じての両国民のふれ合いがさらに

深まれば、今まで両国民が抱き勝ちであった誤ったイメージが互いに修正され、米国も日本もともに独自の文化と伝統を持ち、複雑な課題をかかえている国であることが理解されてくるのでありましょう。さらに両国が、相手国の独自の役割りを正当に評価することができるものと思えます。

すなわち、米国は、広大な国であり、多民族国家であり、連邦国家であり、そしてなによりも世界的なスーパー・パワーであります。一方日本は、狭小な国土の上に単一民族によって形成された国であり、またアジアの一国であります。ともに先進工業国であり、自由と人権を尊重する民主主義の理念において共通するとはいえ、このような基本的な相違点があります。

しかし、他方、日本と米国は、驚くほどの類似点ももっております。社会の内部の流動性がこれほど高く、競争原理がこれほど貫かれている国は、日米両国以外にはありません。国内の諸体制が急テンポな情報化社会への適応を行なっていること、高等教育の広範な普及などにも大きな共通点がみられます。そして、日本人も米国人も現状に満足せず、常によりよい社会を未来に見出そうと努める性向にも国民性の類似点を見出せるのであります。

政治、経済、安全保障問題など多岐にわたる国際組織の中心として自由と安定を維持する米国の役割りは独得のものであり、どの国も代替できるものではありません。他方日本の生き方も平和に徹するという点できわめて特色があります。日米両国お互いがそれぞれの国情と国民性を認め合い、直接の利害は必ずしも同一ではなくても、お互いの立場を尊重することによって、きわめて実のある協力体制が十分実現しうると確信するものであります。

このような趣旨からいえば、私は、日米両国は今後その二国間の関係においても、また国際問題に対処する場合でも、できるだけ政策の選択範囲を広めるべきであると思えます。つねに幅のある話し合いが可能な状態を維持して行くことが望ましいのであります。

米国と日本がこのような協力を実現するならば、そこに始めて太平洋新時代が豊かな内容をもってくるのであります。私個人としては、この太平洋新時代の将来については大きな期待と確信をもっております。かつては困苦欠乏にたえて新世界を見事に開拓し、近くは素晴らしい組織力と個人の勇気によってアポロ計画を成功せしめた米国民は、必ずや現在当面している政治、経済、社会の諸問題を克服し、それが全世界に対し安定的な影響を与えるのでありましょう。またそのパートナーたる日本は、戦後 20 有余年にして世界に誇りうる経済成長を達成してアジアの安定勢力として存在し、さらに旺盛な意欲をもって未来の問題に正面から取組もうとしている国であります。

今や人種、歴史などを著るしく異にする太平洋の二大国が、同盟関係よりもっと高い次元に立って、世界の新しい秩序の創造に協力して行くという世



歴史的な大実験に手をつけようとしているといえるのであります。この実験はようやく始まったばかりであります。私は両国民の善意と信頼と努力の上に、この実験が必ず成功することを確信し、また私自身ニクソン大統領とともに、この実験の序幕を切って落し、沖縄返還の実現の運びとなったことに深い喜びを覚えるのであります。  
御静聴ありがとうございました。

(Translation)

**Speech by Prime Minister Eisaku Sato of Japan  
at the National Press Club  
Washington, D.C.**

November 21, 1969

President Heffernan, distinguished members and guests:

It is the third time that I am addressing you here at the National Press Club. Looking around me, I see quite a number of familiar faces. On this occasion, it is my great privilege and pleasure to speak to you about the new development in international politics and the new relationship between Japan and the United States—what can almost be called the New Pacific Age—which has been brought forth by the current talks between President Nixon and myself.

It is hardly necessary to mention that, for Japan, its relations with the United States are much more important than its relations with any other country. At the same time, I am firmly convinced, not only that the relations of mutual friendship and trust with Japan are immensely important for the United States, but also that the maintenance and promotion of such relations of mutual friendship and trust between Japan and the United States are indispensable conditions for the peace and stability of the Asian-Pacific region. Such being the case, it gave me the greatest pleasure to be able to hold these talks with President Nixon—who is not only an old acquaintance, but is also, of all American Presidents, the best acquainted with Japan, having visited our country six times.

( 52 )

In my talks with President Nixon, we had a frank exchange of views not only on relations between our two countries but also on a wide range of international political problems in general. The results were most satisfactory, and it is perhaps superfluous to mention that the most important result was the solution of the Okinawa problem. As you are aware, the problem of Okinawa has been the major outstanding issue in postwar relations between Japan and the United States. President Nixon and I were, at these talks, at last able to reach basic agreement that Okinawa will be returned to Japan during 1972. The details of the agreement are set forth in the Joint Communiqué.

For a territorial status resulting from war to be changed, in a manner satisfactory to both parties, by peaceful negotiation, is a rare matter in world history. It may be said that Japan and the United States, by solving the problem of Okinawa in such a fashion, have shown a new method of solving international problems in step with the progress of the times, and have blazed the trail towards a new order based on friendship and trust and the way of true peace in the handling of international affairs. I am convinced that through the solution of the Okinawa problem, Japan and the United States have been able to build the firm foundations of a lasting mutual cooperation necessary for the future of the world from 1970 onwards.

There are a few things that I should particularly like to stress on this occasion. These are, the background which enabled this historic negotiation, how the return of Okinawa will shape the Japan-United States relations to come, and how it will affect international politics from 1970 onwards.

In 1953, in the immediate postwar period, the Amami Islands, and in 1968, the Ogasawara (Bonin) Islands, were respectively returned to Japan through talks between Japan and the United States. However, Okinawa, with its 1 million Japanese inhabitants, has been left under the administration of the United States as a strategic stronghold for the maintenance of peace in the Far East. The biggest problem in the negotiations between Japan and the

( 53 )

United States for the return of the islands was nothing more nor less than the role that Okinawa was playing in the maintenance of peace. Japan and the United States agree in their basic recognition of the importance of United States military bases on Okinawa. The peace-keeping function of the bases on Okinawa must continue to be kept effective. However, the fact that our territory, Okinawa, and the 1 million Japanese who live there have been kept under the administration of the United States since the end of the war has left an unresolved feeling in the hearts of the Japanese people,—in other words, it has remained in our thoughts as a symbol of defeat, and this mental block has been exerting a subtle influence on the relations between Japan and the United States.

President Nixon and I have agreed on the return of Okinawa on the recognition that to maintain and promote the friendship and trust of the peoples of Japan and the United States, and to take this opportunity to greatly strengthen the partnership gradually built up, over the twenty-odd years of the postwar period, and based on mutual interests and common ideals, would serve the national interests of both countries and would also contribute toward the peace and development of Asia. In other words, the return of Okinawa has only been possible because Japan and the United States have points of agreement in the various basic democratic ideals such as personal liberty, equality, the respect for human rights and the realization of social justice. For the trust and the forbearance shown to us by the members of the United States Administration and Congress, and the friendship and goodwill shown to us by the people of the United States during these negotiations, I should like to express my deepest gratitude, and I was impressed even further by the strength of the ties between our two nations. On the other hand, it is a matter of deep regret that our Northern Territories, of which we were deprived as a result of the same World War II, have still not been returned to the homeland. Heartened by the shining example of Okinawa, I am determined to continue my efforts to realize, by peaceful means, the just demands of the Japanese people.

It is natural that, with the return of Okinawa, Japan should gradually assume the responsibility of the local defense of the islands. Japan's self-defense capabilities are already filling an important role in securing the primary defense of Japan and it is our policy to continue to consolidate such capabilities. For my part, it is my expectation and conviction that the United States, in response to the hopes of the free nations, will continue to maintain its function of deterring war in Asia along the lines of President Nixon's pronouncement at Guam.

In connection with this point, President Nixon and I both reaffirmed our intention firmly to maintain the Japan-United States Security Treaty. Of course, the first objective of Japan in continuing this treaty is to ensure Japan's own security by filling the gaps in its own capabilities through cooperation with the United States. However, in the real international world it is impossible to adequately maintain the security of Japan without international peace and security of the Far East. . . This is where the second objective of the Japan-United States Security Treaty comes to the foreground—the cooperation of Japan and the United States in the form of the use of facilities and areas in Japan by United States forces for the security of the Far East in a broader context. And it would be in accord with our national interest for me to determine our response to prior consultation regarding the use of these facilities and areas in the light of the need to maintain the security of the Far East including Japan.

In particular, if an armed attack against the Republic of Korea were to occur, the security of Japan would be seriously affected. Therefore, should an occasion arise for United States forces in such an eventuality to use facilities and areas within Japan as bases for military combat operations to meet the armed attack, the policy of the Government of Japan towards prior consultation would be to decide its position positively and promptly on the basis of the foregoing recognition.

The maintenance of peace in the Taiwan area is also an important factor for our own security. I believe in this regard that the deter-

mination of the United States to uphold her treaty commitments to the Republic of China should be fully appreciated. However, should unfortunately a situation ever occur in which such treaty commitments would actually have to be invoked against an armed attack from the outside, it would be a threat to the peace and security of the Far East including Japan. Therefore, in view of our national interest, we would deal with the situation on the basis of the foregoing recognition, in connection with the fulfillment by the United States of its defense obligations. However, I am glad to say, such a situation cannot be foreseen today.

I pray that peace will return to the Indo-Chinese peninsula as soon as possible, and that the peoples of the area will be able to work again for stability and prosperity; at the same time, I am earnestly exploring what role Japan could play to cooperate with such efforts. I believe that Japan's role should be, naturally, to cooperate in the rehabilitation and development of the economy of the Indo-Chinese peninsula, and if we are asked, to participate in, and to cooperate with, in a manner best suited to Japan, any international peace-keeping machinery which may be set up after the cessation of hostilities. I express my deep respect for the sincere efforts being made by President Nixon and all those Americans concerned toward the realization of a peaceful and just settlement of the problems of Vietnam and Laos, and also for the sacrifices that the United States has made to assure the people of South Vietnam the opportunity to determine their own political future without outside interference. At the same time, I have a deep understanding of the position of the United States, and sincerely hope that such efforts will bear fruit.

At the beginning of my remarks today, I mentioned a "New Pacific Age". This is the age where, having put an end in name and in fact to the "postwar" era with the return of Okinawa, Japan, in cooperation with the United States, will make its contribution to the peace and prosperity of the Asian-Pacific region and hence to the entire world. Again, this may be seen as a transition from a "closed" relationship between Japan and the United States,

confined to the solution of bilateral problems which concern the two countries alone, to an "open" relationship, where both countries will now be able to work together to further promote broad international cooperation.

In order to facilitate such a transition, it is first necessary to formulate a projection of the 1970's. I believe that the 1970's will not mark a radical change from the 1960's, when the United States and the Soviet Union were shouldering the primary capacity and responsibility for the maintenance of world peace, but when other countries were also enlarging their spheres of independent action in accordance with their respective objectives.

In other words, this means that, first of all, we place great expectations on the two major powers, the United States and the Soviet Union. That is, it would be necessary for the United States and the Soviet Union to devote even greater efforts than they did in the 1960's towards such problems as further relaxation of tensions, peaceful settlement of local disputes such as are seen in the Middle East, and the realization of various arms control measures, all for the maintenance of world peace. In this sense, the Japanese people strongly hope that the negotiations between the two major powers for the limitation of strategic arms, which have recently begun, will become the starting point for future general disarmament.

It could also be said that the 1970's will be a decade when the various major countries other than the United States and the Soviet Union should assume greater responsibilities. We have a profound concern over the future of Communist China which is at present devoting great efforts to the development of nuclear arms, and the relationship that the United States and the Soviet Union will have, respectively, with Communist China. Having the United States, the Soviet Union and Communist China as our neighbors, Japan strongly hopes that in the 1970's Communist China will live in peace with the United States and the Soviet Union, in the same way as the efforts for maintaining peace between the United States and the Soviet Union have developed. It is to be hoped also that

Communist China will revise the rigid posture that it has been taking, and participate in international society as a country that will carry out its responsibilities in a constructive manner in the cause of international peace. For this purpose, I consider that both the United States and Japan should always keep their doors open towards Communist China.

The responsibilities that must be shouldered by Japan and the Western European countries in the 1970's will also be great. The role that these countries could be expected to play for easing international tensions or for the harmonious development of the world economy is expected to increase in the future. When we realize that the North-South problem is one of the greatest tasks which mankind will have to face and endeavor to resolve for a long time to come, we strongly feel the necessity for the industrial nations to transcend their short term interests and to make further concerted efforts to assist the developing countries in their nation-building. An age when Japan and the United States, the two great countries on both sides of the Pacific, cooperate with this perspective in mind: this is what I would call the New Pacific Age.

Next comes the problem of what form such cooperation between our two countries should take. As far as the bilateral relations between our two countries are concerned, it is quite obvious that with the settlement of the Okinawa problem, one of the most pressing issues facing us would be in the economic field. This involves various issues related to capital transactions and trade, and efforts to ease the relations between the United States and Japan are already being exerted by responsible persons in each country. It is my intention to exert my further efforts on this matter. In the 1970's, it is expected that both the cooperative and the competitive aspects in the economic field between our two countries will increase not only in our bilateral relations but also in other parts of the world. In this respect some friction may tend to arise between our two countries. However, compared with the magnitude of the benefits which will accrue through the deepening of mutual dependence as seen in the immense amount of trade between our two

countries, the friction which may occasionally arise from competition is hardly important.

What is more important is to always understand the other country's position, and in the spirit of give and take, to make the necessary considerations within the framework of international rules so that localized frictions do not harm the broader, political ties between our two countries. It is with this in mind that I have pursued the policy of liberalization of both trade and capital. As a matter of fact, in December, 1968, the Japanese Government in a Cabinet decision decided to conduct an overall review of the import quota items at an early date and to liberalize, within two or three years, a substantial range of those items. Last month the Japanese Government followed it up with the decision to halve the number of the existing import quota by the end of 1971, and to render utmost efforts to liberalize the remaining items under control. In the field of foreign capital liberalization efforts have been made to widen the scope of the industries in which foreign capital can profitably invest. I am determined to further promote this policy of trade and capital liberalization, and, at the same time, it is to be hoped that the United States will continue her stable economic growth and preserve her liberal economic policy.

In Asia, where Japan and the United States have a common concern, efforts being made by the countries in the region for self-help, regional cooperation by countries with common interest, and economic and technical assistance from industrialized countries have combined to bring about a gradual increase in the speed of development and in many areas progress may be seen in the establishment of a stable national system and in the initiatives taken in economic construction. In spite of all this, poverty in Asia has yet to be overcome, and we can hardly say that the foundation has been laid for the sustained development of the Asian countries. This situation in Asia is not expected to change significantly in the 1970's.

It is here that I find one of the greatest challenges for my country as the leading industrialized nation in Asia. The national goal that we have to pursue in the 1970's is to cooperate, in non-

military fields, with the Asian countries that differ in race, religion and culture, in their efforts to secure prosperity through mutual cooperation while preserving their freedom and independence. Since the United States plays the central role in preserving global peace and also holds great responsibility for the security of Asia, I believe that it is Japan rather than the United States that should take the leading role in such fields as economic and technical assistance towards the nation-building efforts of the Asian countries.

Although Japan has become the second ranking economic power in the free world, the gap in economic potential between my country and the United States is still very large, and the fact remains that Japan's per capita income is only the world's twentieth. We also face the difficult task of overcoming the great insufficiency in social capital and public investments. At the same time, however, there is emerging among the Japanese people a desire to play a meaningful role in making a positive contribution to the world. There is no doubt that the settlement of the Okinawa problem will give confidence to the Japanese people and that it will become the turning point in directing the constructive will of the nation to the aim of bringing stability to Asia.

We have already set our goal for the 1970's to make it the decade for Asian development but Japan alone cannot hope to secure the peace and prosperity of Asia. Along with the efforts of the Asian countries themselves, both the material and moral cooperation of the industrialized countries that have a great interest in this area are required. This is because in the construction of a new Asia, not only the material aspects such as the eradication of poverty, famine and disease but the attainment by the Asian people of freedom and social justice must also become one of the goals. Here again I find the shape of a New Pacific Age, where a new order will be created by Japan and the United States, two countries tied together by common ideals.

The cooperation between Japan and the United States is not confined to our two countries or just Asia. As this cooperation is one between the first and second ranking economic powers in

the free world, it would extend over a wide range of global problems which I dealt with earlier in my projection of the 1970's, such as the easing of general tensions; the strengthening of the function of the United Nations, arms control and the realization of disarmament, the settlement of the North-South problem, the preservation of the free trade system and the securing of a stable international monetary system.

Now, in order to establish such a wide range of cooperation, what should we bear in mind? It is essential that the peoples of both countries increase their understanding of each other and foster mutual trust. Exactly one hundred years ago forty Japanese immigrants came to the United States for the first time, but now over one hundred thousand Japanese visit the United States annually, and more than two hundred thousand Americans visit Japan each year. As the contacts between our peoples deepen through such direct contacts or by means of the mass media, the erroneous image that our peoples sometimes had of each other will be corrected, and they will begin to understand that both Japan and the United States have their own culture and tradition, and that both are countries facing a multitude of complex problems. And it is in this way that a proper evaluation on the unique roles that each of our two countries has to play will become possible.

The United States is a country of wide open spaces, a multi-racial nation, a Federation of States, and above all, a superpower. On the other hand, Japan is a country confined to a limited land area and inhabited by a homogeneous race, and it is also one of the many countries of Asia. Both are leading industrialized countries and share the common democratic ideals of liberty and the respect of human rights, but there are these fundamental differences of which I have spoken.

On the other hand, Japan and the United States are surprisingly similar in some aspects. Nowhere is there such a high degree of social mobility nor is the rule of fair competition applied so universally than in our two countries. We can also find some similarity in the rapid adaptation of our various domestic systems to our

increasingly mass information-oriented societies and the wide diffusion of higher education. We are also able to see a similarity in the national characteristic where both the Japanese and the Americans are never satisfied with the present, and their tendency to constantly endeavor to bring about a better society in the future.

The role of preserving freedom and stability that the United States plays at the center of a wide range of international organizations covering political, economic and security fields is unique, and can be replaced by no other country. Japan's way of life of dedication to peace also has its unique aspects. I am convinced that if we each recognize the national sentiment and the national characteristic of the other, and respect each other's position although our immediate interests may not always coincide, a system of truly substantial cooperation can most certainly be realized.

From this viewpoint, I believe that our two countries should widen the range of policy options in both their bilateral and multilateral relations. It is desirable to maintain a state of affairs where it is always possible to engage in a broad and flexible dialogue.

If Japan and the United States can bring off this kind of cooperation, it is then that the New Pacific Age will become rich in substance. I personally have high expectations and strong belief in the future of this New Pacific Age. The American people, which once developed the New World in the face of tremendous hardship and want, and in our own time, succeeded in the Apollo Project through brilliant organization and personal courage, will certainly conquer the present problems they face in the political, economic and social fields, and this will exert a stabilizing effect on the entire world. Her partner, Japan, has achieved an economic growth during the twenty-odd post-war years which is outstanding in the world, and having become a power for stability in Asia, is a country that is about to tackle, with vigor, the problems of the future.

It can be said that the two great nations across the Pacific, of quite different ethnic and historical backgrounds, are on the verge of starting a great historical experiment in working together for a new order in the world, on a dimension that transcends a

bilateral alliance. Although this experiment has just begun, I have full faith that this experiment will surely be successful due to the goodwill, mutual trust and efforts of our two nations. I am especially pleased that it was President Nixon and I who set this experiment in motion by bringing about the return of Okinawa.

Thank you for your attention.

#### VIII. 沖縄百万同胞に贈る言葉

(昭和44年11月21日)

沖縄百万同胞の皆様

私とニクソン大統領との会談の結果、沖縄県民の皆様をはじめとするわが国国民の年来の念願でありました沖縄の祖国復帰が、1972年中に「核抜き、本土並み」という国民の総意にそった形で実現することになりました。復帰のための努力を続けてこられた沖縄県民各位の強い御支援の賜物であります。

沖縄の祖国復帰は申すまでもなく、第2次大戦後四半世紀にわたって本土、沖縄の一億国民がいだき続けてきた民族的悲願でありました。かつて私が沖縄を訪問した際「沖縄の祖国復帰が実現しない限り、わが国にとって戦後は終らない。」と申しましたように、沖縄の施政権返還問題は、政治の最高責任者としての私にとっても最大の課題であったのであります。私は日米首脳会談を終った今、ただ感慨無量であります。

今回の沖縄返還についての日米両国の合意は、過去四半世紀にわたる日米両国の友好と信頼、理解と協力があってはじめて達成された成果であり、同時に、これは将来にわたって日米両国の協力関係が不動のものであることを実証してあますところがないと思っております。

さて、1972年に沖縄を日本に返還するという合意ができた以上、今後は本土、沖縄双方が相協力し、全力をあげて復帰準備に万全を期することが大切であります。

まず沖縄の施政権を日本がゆずりうけるためには、沖縄の返還協定をはじめ、今後日米間で話合わねばならない数多くの問題がありますが、これらは日米の外交ルート、沖縄に関する日米協議委員会及び今後沖縄に新設することとしている高等弁務官及び日本政府代表よりなる機関を通じて解決して行くこととなることは申すまでもありません。大切なことは、沖縄内政上の問題であります。なんといっても25年間米国施政権下におかれてきた沖縄

は、本土の県、市町村と比較して制度面で大きな相違があるのみならず、内容においてその行政及び住民福祉の水準に大きな格差があります。これを近々2、3年のうちに立派な沖縄県の県造りをし、行政及び住民福祉の水準を本木並みにして迎え入れることは容易な事業ではありません。しかし、私は、沖縄同胞の皆さんと協力して、明年度以降沖縄援助費を大巾に拡充強化し、本土沖縄一体化の施策を強力に推進し、この難事業の達成を期する決意であることを申し上げたいのであります。

また、沖縄の本土復帰に伴い、沖縄経済界には復帰後の沖縄経済について不安が高まっていると聞いています。沖縄は長い間独自の経済単位を形成し、繁栄してきたのでありますが、本土復帰後は日本経済の中に統合され、その一環としての役割りを担うこととなるのでありますから、私は当面の措置として、本土復帰に際し沖縄経済が急激な変動をきたさないよう、沖縄の特殊性を考慮した特別措置ないし過渡的経過措置について検討を加える一方、長期的には日本経済の一環としての沖縄経済の新たな役割りを探求し、沖縄の長期開発構想を樹立して、沖縄経済の振興に努力するつもりであります。また、以上の沖縄の復帰準備施策を総合的、計画的、かつ、強力に遂行するため、明年度において必要な行政機構を新設整備して、これに当らせる決意であります。

最後に、沖縄の祖国復帰対策を樹立するに当り、沖縄住民の意志を国会に反映させることの重要性を私は痛感しております。沖縄の本土復帰のメドが確定した現在、できうる限り早い機会に国会において沖縄住民の国政参加が決定されるものと強く期待するものであります。

私はこの機会に、琉球政府及び沖縄住民の方々が沖縄の本土復帰にそなえて、一致協力して創意と工夫をこらし、明日の沖縄県を築くため英知を結集されることをお願いするとともに、沖縄の祖国復帰という世紀の大事業が、本土と沖縄の官民一致の協力によって立派になしとげられることを信じて疑いません。

沖縄の施政権返還について日米両国の合意が行なわれたこの記念すべき秋に当り、私ははるかに沖縄百万同胞の皆さんに思いをはせ、謹んで御挨拶を申し上げる次第であります。

#### IX. ニュー・ヨーク空港到着の際のステートメント

(昭和44年11月21日)

私は、ワシントンにおいて、3日間にわたるニクソン大統領との会談を終

え、ただ今当ニュー・ヨークに到着いたしました。この3日間の会談の成果は、すでに共同声明で明らかにされたとおりであります。私は隔意なき討議の中で示されたニクソン大統領を始めとする米政府首脳者の国際間の平和維持に対する熱意と努力に深く印象づけられました。また、沖縄返還問題を始め多岐にわたる今回の成果が、さらに日米のパートナーシップを強固にする土台となることを確信いたします。

さらに、日米間の信頼と友好の関係が、今後アジア及び世界の平和と安定に大きな力となり、新しい国際秩序の確立に役立つよう念じてやみません。今回の当地滞在はきわめて短い期間であります。ニュー・ヨークがその伝統の基礎の上に立って、文字どおり国際交流の中心地として、ますます発展を続けられている様子を目のあたりにして喜びにたえません。国際的な規模における情報化社会に移行しつつある今日において、ニュー・ヨークが今後大西洋と太平洋とを結ぶ中心地としての役割りを果されることを強く期待するものであります。

(Translation)

#### Remarks by Prime Minister Eisaku Sato on Arrival in New York

November 21, 1969

I have just arrived here in New York after having completed three days of talks with President Nixon in Washington.

The results of the talks are as already set forth in the Joint Communique. I was deeply impressed by the keen desire and effort to maintain international peace as shown by President Nixon and other leaders of the United States Government during the course of our frank discussions. I firmly believe that the settlement of the Okinawa problem and the other fruitful results of these talks will provide a solid foundation for further strengthening the partnership between the United States and Japan.

I also sincerely hope that the relations of mutual trust and friendship between the United States and Japan will come to be a major support of peace and stability in Asia and the whole world and will help to establish a new international order.

Although my stay here will be all too brief this time, I am very happy to see that your city, in line with its traditions, is continuing to develop as a true center of international exchange. Now that we are moving into an information-oriented society on an international scale, I strongly hope that New York will play the role of a center to link the Atlantic and the Pacific.

X. サンフランシスコ空港到着の際のステートメント

(昭和44年11月23日)

この度私は、ニクソン大統領はじめ貴国要路の方々とお会いして、日米両国関係の諸問題を語り合い、相互に十分理解を深め、所期の目的を達して帰国の途次、かねて訪問したいと念願していたサンフランシスコに一兩日を過す機を得ましたことは、望外のよることです。

サンフランシスコ市は、ゴールデンゲート・ブリッジによって代表される明麗な風光と、日米両国経済、文化交流の表玄関として、われわれ日本人にとってあまりにも知られた都市であります。単にそれだけでなく、歴史的に見てわが国とサンフランシスコはとりわけ深いつながりを持っております。

すなわち、1860年に日本の蒸気船咸臨丸が、日米修好通商条約批准書交換の使節を乗せてサンフランシスコに入港したことは、日本が近代化の第一歩をふみ出したものであり、さらに1951年いわゆるサンフランシスコ平和条約が当市のオペラハウスにおいて調印されたことは、同時期に調印された日米安全保障条約とともに戦後日本再建の礎石となったものとして、ともにわが国にとって計り知れない重要意義を持つものであります。

また本年は、わが国から約40名のパイオニア達が、移住者の先駆としてカリフォルニア州に入植して以来百年目に当り、これを記念して9月当地で大々的な日本週間行事がくりひろげられ、両国民の理解と親睦をさらに深めたことは、私としてよることばたえません。

親愛なるサンフランシスコ市民の皆様、私の心からの挨拶を送ります。

( 66 )

(Translation)

Statement by Prime Minister Eisaku Sato  
on His Arrival at the San Francisco  
International Airport

November 23, 1969

It has been my long-cherished desire to come to this fascinating and thriving city. No words can describe my delight at the opportunity afforded me now to spend a couple of days with you, on my way home after friendly talks with President Nixon and other leaders of your Government on various problems of Japanese-American relations. Through these talks we have deepened our mutual understanding and attained the objectives we had in view.

The City of San Francisco is more than familiar to the Japanese people, not only for its natural and man-made beauty and grandeur, such as the Golden Gate and the bridge spanning it, but also as the gateway for economic and cultural exchanges between Japan and the United States. Moreover, it has a close historic association with Japan.

The Japanese mission to exchange the instruments of ratification of the Treaty of Amity and Commerce between Japan and the United States, which marked Japan's first step toward modernization, sailed into the port of San Francisco aboard a Japanese steamboat, the "Kanrin Maru", in 1860. The Treaty of Peace with Japan was signed in the Opera House of this city in 1951. This Treaty, together with the Japan-United States Security Treaty signed on the same day, constituted the foundation for Japan's postwar reconstruction, and they have invaluable significance to our country.

This year happens to be the centennial of the first settling of nearly forty pioneers from Japan in the State of California. I am highly pleased that Japan Week was celebrated here in September with many colorful events to commemorate it and that the event contributed to the further strengthening of friendship between our two peoples.

( 67 )



I extend to you, dear citizens of San Francisco, my kindest greetings.

XI. アポロ 12 号成功に対するメッセージ (訳文)

(昭和 44 年 11 月 24 日)

アポロ 12 号の宇宙飛行士の月からの栄えある帰還を心からお喜び申し上げます。

特に今回は、月面滞在時間を延長し、飛行士の行動範囲を拡げたほか、原子力電池の使用、地震波による地殻測定など前回よりもさらに技術的に進んだ成果を収められたことは、ただ感嘆のほかありません。

米国がアポロ 11 号の成功に引き続き、今回のアポロ 12 号による偉業を達成し、人類の月世界征服という最も困難な事業に関し、着々となし遂げつつある驚異的な進歩に対し心からの祝意を表したいと思います。

今回の画期的な偉業を目のあたりにして、私は、人類の持つ無限の可能性に強く印象づけられました。

貴国の宇宙開発が引き続き成功をおさめるよう衷心より祈念しつつ、この記念すべき日を貴大統領並びに米国民の皆様とともに心から慶祝いたしたいと思います。

Message by Prime Minister Eisaku Sato  
on the Success of Apollo 12

November 24, 1969

Mr. President:

I heartily rejoice at the news of the safe return of the astronauts of Apollo 12 from the moon.

I am full of admiration for the achievements of this venture, with evidences of further technical advance from the previous one, such as a longer stay on the moon for a greater range of activity, the use of the atomic energy battery, the survey of the moon's crust by seismic waves.

I tender my sincere congratulations on the spectacular progress

( 68 )

the United States is steadily making in the most challenging work of man's exploration of the moon, as shown by the feat of Apollo 12 closely following the success of Apollo 11.

The great work just achieved has impressed upon me the unlimited potentialities of mankind.

Let me join you and the American people in celebrating this memorable day with my heartfelt wishes for the continued success of your space program.

Respectfully,

Eisaku Sato  
Prime Minister of Japan

XII. 離米に当たってのニクソン大統領あてメッセージ (訳文)

(昭和 44 年 11 月 25 日)

親愛なる大統領閣下

偉大なる貴国に別れを告げるに当り、きわめて意義深く、かつ、有益であった貴国訪問の期間中に、貴大統領が私ども一行に対し与えられた心暖まるおもてなしに対し、重ねて心よりの感謝の意を表したいと存じます。

私は、ワシントン滞在中を通じ、閣下の立派なお人柄と先見の明ある政治的識見に深い感銘を受けました。閣下との会談において、沖縄返還問題につき日米双方にとり満足すべき解決を見出すという永年われわれに託されてきた使命をようやく達成し、それにより日米両国間の相互理解と友好を一層深める上に貢献しえたことは、私の特に喜びとするところであります。そしてこの点に関しては、閣下の卓越せる指導力及び日本国民の熱烈な願望と日本政府の立場とに対する深い御理解に対し厚く感謝しております。

私は、これをもって日米両国が以前にもまして、はるかに強固な基盤の上に築かれた相互協力関係の新時代に入ったことを確信するものであります。

私は、今後とも閣下との緊密な個人的接触を維持し、人類にとり安定した平和な世界を築き上げるという困難な事業を遂行するに当り、閣下と手を携えて努力する決意をあらたにしております。

離米に当たって、閣下の御健勝と、御高職における御成功と、あわせて貴国民の御幸福と御繁栄をお祈り申し上げます。また、閣下並びに暖い歓迎を

( 69 )

もって私どものワシントン滞在を記念すべきものとして下さったニクソン夫人に対し、妻とともに心からの御挨拶をお送りしたいと存じます。

敬具

昭和44年11月25日

内閣総理大臣 佐藤 栄作

**Message by Prime Minister Eisaku Sato  
to President Richard Nixon upon  
Departure from the United States**

November 25, 1969

Mr. President:

Upon leaving your great Republic, I wish to express to you once again my most sincere gratitude for the heartwarming hospitality you so kindly extended to me and my associates during our very rewarding and profitable visit to the United States.

Throughout my stay in Washington I was deeply impressed by the strength of your character and your prescience in statecraft. It is a source of particular pleasure for me that through our talks we have finally fulfilled the mission long entrusted to us to find a mutually satisfactory solution to the problem of reversion of Okinawa to Japan, thereby contributing to better understanding and firmer friendship between our two countries. I highly appreciate your eminent leadership and your deep understanding of the ardent desire of the Japanese people and the position of the Japanese Government.

I am convinced that our two countries have now entered a new era of mutually cooperative relationship, resting upon a far stronger foundation than ever before.

It is my wish, Mr. President, to continue my close personal contact with you as heretofore. I have renewed my determination to devote myself, in concert with you, to the task of building a stable and peaceful world for mankind.

( 70 )

I am starting for home, with best wishes for your good health and success in your exalted office and the happiness and prosperity of the American people. Mrs. Sato joins me in sending our best regards to you and Mrs. Nixon, who was such a gracious hostess and made our stay in Washington a memorable one.

Respectfully,

Eisaku Sato

Prime Minister of Japan

XIII. 離米の際のステートメント

(昭和44年11月25日)

私は、今般の米国訪問において、ニクソン大統領をはじめ米国政府首脳の方々と親しく会談し、日米両国が共通の関心を有する諸問題及び現下の国際情勢に関し忌憚のない意見の交換を行ないましたが、今回の訪問は、過去二回のいずれにもまして有意義であったことをこの上もなく喜ばしく存じております。

ニクソン大統領との会談はきわめて卒直、かつ、友好的なふん囲気の中で行なわれ、これまで日米両国間に築き上げられてきた相互理解と信頼の関係を一層緊密化する上に大きく貢献しえたものと確信しております。中でも今回の会談の最も重要な成果は、戦後永きにわたって日米両国間の最大の懸案となっておりました沖縄問題について、日本を含む極東の平和と安全を損うことなく、日米両国の満足する形で、沖縄の施政権の日本への返還を実現することに合意が成立したということでありました。

この沖縄返還は、単なる領土の返還というだけでなく、平和的な話し合いにより領土問題の解決をはかったという点において、特に世界史的意義を有するものでありますが、またそれは、アジアひいては世界の平和と繁栄のため日本が応分の国際的役割りを果しうるための飛躍台となるものであり、これを契機として日米関係もさらに一層強固なものとなるであろうことを確信するものであります。

私は、このように実り多き米国訪問旅行を終え、これから帰国の途につくわけではありますが、帰途米国太平洋岸の玄関であるこの風光明媚な都市サン・フランシスコに立ち寄り、市民の皆様の暖いおもてなしを受け感激しております。

( 71 )

終りに当り、今回の私の米国滞在中、ニクソン大統領閣下御夫妻をはじめ各方面から受けました丁寧な御配慮に対し、心から御礼を申し述べたいと存じます。  
ありがとうございました。

(Translation)

**Statement by Prime Minister Eisaku Sato at San Francisco International Airport on his Departure for Japan**

November 25, 1969

I am very happy to state that I have been able to have a frank and candid exchange of views with President Nixon and other leaders of the United States Government on matters of common interest to Japan and the United States and on the current international situation and that this visit of mine has proved even more meaningful and fruitful than my previous two visits to this country.

My talks with President Nixon were conducted in a most straightforward and friendly atmosphere, and I am convinced that they have greatly contributed to consolidating further the relations of mutual understanding and trust that have already been established between our two countries. The most important result of these talks is that an agreement has been reached on the question of Okinawa, which has long been the biggest issue pending between the two countries since the end of the War, an agreement that the administrative rights over Okinawa should be returned to Japan in a manner satisfactory to both countries, without detriment to the peace and security of the Far East including Japan.

This return of Okinawa is of particular significance in world history in that it is not merely a reversion of territory but also a solution of a territorial question through peaceful talks. I firmly believe that it will also serve as a springboard for Japan to play an international role commensurate with her national strength for the peace and prosperity of Asia and the world and as an occasion to add further strength to the bond of friendship between Japan

( 72 )

and the United States.

I am ending such a rewarding visit to this country and leaving for Japan today. I am deeply touched by the warm hospitality of the citizens of the fair city of San Francisco, the gateway to America on the Pacific Coast, which I have had the good fortune to visit on my way home.

In conclusion, I wish to express my most sincere gratitude for the courtesy and kind consideration extended to my wife and me by President and Mrs. Nixon and many other American people during our stay in this great Republic.

Thank you very much.

XIV. 羽田空港到着の際の帰国ステートメント

(昭和44年11月26日)

私は、只今10日間にわたる米国訪問を終えて帰ってまいりました。私はなによりもまず、全国民の皆様に対し、今回の私とニクソン大統領との会談の結果、われわれ全国民の待望する沖縄の祖国復帰が、1972年中に、核抜き、本土並みという国民の総意にそった形で実現することとなったことを御報告申し上げます。

沖縄返還に対する初心を貫徹しえて、この羽田の土を踏んだ今、私の胸中には、サン・フランシスコ講和会議以来続けられてきたわが国の政府、国民を挙げての沖縄返還のための努力、また祖国復帰の日の1日も早からんことを願いつつ、日本国民としての誇りを失わず、20余年の長きにわたり米国の施政権下に営々として努力してこられた沖縄県民の御苦労等々が去来し、ただただ、感慨無量であります。

と同時に、今日、かような喜ばしい報告を申し上げるに至りましたのも、国民各位の深い御理解と御支援の賜物であり、直接対米交渉の任にあたりました者として、深い感謝の念を禁じえません。

これから、いよいよ、本土と沖縄の双方において、沖縄の本土復帰のための具体的な準備にとりかかるわけであります。私は、沖縄の本土復帰は施政権返還の時点で終るものとは考えておりません。沖縄が豊かな県となり、また本土復帰が沖縄県民一人一人にとり物質的にのみならず、精神的にも真に意味あるものとなったときに、はじめて沖縄の本土復帰は完成するのであり

( 73 )

ます。われわれ日本国民は、かかる信念の下に、全力をあげて、この歴史的  
事業に取り組んで行こうではありませんか。沖縄県民はじめ国民各位の御理解  
と御協力を心からお願ひするものであります。

さて、今回の訪米におきまして、私は、ニクソン大統領との間で1970年  
代の世界において、日米両国が果たすべき役割りにつき腹藏なき話合いを行な  
ってまいりました。沖縄返還をもって、日米友好関係は今後、一層強固なも  
のとなることが期待されます。私は、この見地から、ニクソン大統領との間  
で、日米安全保障条約の堅持を確認し合うとともに、1970年代の世界、特に、  
アジアの平和と繁栄のために、日米両国が今後一層の協力を行なうことにつ  
き合意したのであります。

私は、沖縄返還問題の解決は、わが国が国内的にも国際的にも、真の平和  
国家として新たな飛躍をとげるための重要な契機となると確信しておりま  
す。かかる重大な意義を持つ使命を果たして帰国した只今、自由にして豊かな  
社会を国の内外に築くために、今後一層の努力を尽す決意を新たにすると  
ともに、国民各位の一層の御支援を念願する次第であります。

出発の際のお見送り、また本日のかくも盛大なお出迎えに心から感謝いた  
します。

### 第 3 部 米国側の挨拶、メッセージ等

#### I. ホワイト・ハウス歓迎式における

#### ニクソン大統領の挨拶

#### Remarks by President Richard M. Nixon at the White House Welcoming Ceremony

November 19, 1969

Mr. Prime Minister, Ladies and Gentlemen  
gathered here on the South Lawn  
of the White House:

It is a very great honor for me, not only in my official capacity  
representing the American people, but also personally, to welcome  
you, Mr. Prime Minister, to the United States again.

This is your third visit to the United States, but this is indeed  
an historic day. As we meet here, this ceremony is being carried  
live by television to billions of people in Japan as well as people in  
the United States. And at this same moment millions of people all  
over the world can see two Americans from earth walking on the  
face of the moon.

The magnificent welcome which was given to our astronauts when  
they visited Tokyo just a few weeks ago is an indication of the ties  
that bind our two peoples together. Today, as we look to the future  
of the Pacific, we recognize that whether peace survives in the last  
third of the century will depend more on what happens in the Pacific  
than in any other area of the world. And whether we have peace  
and prosperity and progress in the Pacific will depend more than  
anything else upon the cooperation of the United States and Japan,  
the two strongest and the two most prosperous nations in the Pacific  
area.

In this period, Japan, which has the fastest growing economy

of any major country in the world, will play a key role. That is why our talks are so important, because we must discuss those areas of cooperation where our two peoples and our two Governments can work together for our common goal of peace and prosperity for the whole Pacific area.

Mr. Prime Minister, I believe that these talks will very probably be the most successful talks that have been held between representatives of our two Governments going back over many years. I say this not only because the talks have been well prepared by both sides, but also because we have the good fortune not only of being official friends, but personal friends.

Just a few yards to the south of us at the Tidal Basin, we can see the cherry trees that were presented by the people of Tokyo to the people of Washington many years ago. There is a Japanese proverb that "There are no strangers under the cherry blossoms." This is not cherry blossom time, but I can assure you that as we meet today we meet as friends, official friends, personal friends, working together for the peace, the friendship and the prosperity that both of our countries want.

ホワイト・ハウス歓迎式におけるニクソン  
大統領の挨拶 (訳文)

(昭和44年11月19日)

総理大臣閣下、ここホワイト・ハウス南庭にお集りの皆様

総理大臣閣下を米国に再びお迎えすることは、米国民を公式に代表するものとしてのみならず、私個人としても非常に光榮とするところであります。

今回で、総理大臣閣下は米国を三度訪問されたわけですが、今日はまさに歴史的な日であります。われわれが、今臨んでいるこの歓迎式の模様は、テレビの実況中継を通じて米国民のみならず、幾多の日本国民の皆様にも伝えられております。

そして、この同じ瞬間に世界中の数多くの人々が二人の米国人が、月面上を歩くさまをみることができるのであります。

(76)

わが国の宇宙飛行士が、数週間前東京を訪問したときに受けましたすばらしい歓迎ぶりは、日米両国民を結ぶきずなを強く示すものであります。今日、太平洋地域の将来に目を向けるとき、今世紀の残り三分の一の期間平和が維持されるか否かは、世界の他のいずれの地域にもまして、太平洋地域の情勢いかにかかっていると認められるのであります。そして太平洋地域の平和と繁栄と発展は、他の何ものにもまして太平洋地域で最も強大で、かつ、繁栄している日米両国の間の協力がいかにかかっています。

この期間において、世界の主要国の中で今日最もテンポの早い経済成長を続けている日本は、重要な役割りを果たことになるでございましょう。そしてそれゆえにこそ、われわれの会談が重要となる所以であります。われわれは、太平洋地域全体の平和と繁栄という共通の目標に向けて、日米両国民及び両政府が、協力をなす分野について討議を行なわなければならないのであります。

総理大臣閣下、私は過去何年間にもわたって行なわれてきた両国政府間の首脳会談のうちで、今回の会談が必ずや最も実り多い会談になるものと確信しています。これは今回の会談に関し、両国によって事前に周到な準備がなされているからというだけではなく、幸いなことにわれわれが、公的な友人であるとともに、個人的にも友人であるからであります。

ここから南に向ってほど近いタイダル・ベースンには、その昔東京市民からワシントン市民に贈呈された桜の木がみられます。日本には、「花の下、赤の他人はなかりけり」ということわざがあります。今は桜の季節ではありませんが、今日私が総理大臣閣下とお会いするに際しては、日米両国が希求している平和と友好関係と繁栄のために力を合わせる、公私両面にわたる友人としてお会いしているのだということ、私は特に申し上げたいと思えます。

II. ニクソン大統領夫妻主催晩餐会における  
同大統領の挨拶

Remarks by President Richard M. Nixon at a Dinner Honoring  
the Prime Minister of Japan and Mrs. Sato  
Given by the President and Mrs. Nixon

November 19, 1969

Mr. Prime Minister, Madam Sato,  
and our Guests from Japan and from the United States:

(77)

It is a very great honor for me to welcome the Prime Minister and Mrs. Sato and the members of their party to our country and to this House, and in welcoming them, to do so both officially and personally.

I cherish memories of my visits to Japan, and when the Prime Minister has been my host. We are very honored to have him here in his capacity as Prime Minister of a great and friendly country in the Pacific and in Asia.

I have been trying to think of something that would be appropriate to say to this company made up of so many people from the United States and Japan and who are so deeply interested in Japanese-American friendship.

I think first of our Honored Guest, the Prime Minister. I think of his leadership of his country which goes back over many years. He has been Prime Minister now for five years. And I think that perhaps the success of his leadership is best indicated by what I understand is the literal translation of his first name, Eisaku Sato. Eisaku, as I understand, means to create prosperity, and Japan has created prosperity under Prime Minister Sato.

We who have visited Japan and we who have read about it know that Japan is the modern miracle of economic progress. We know that its economic growth at ten percent a year is the highest of all the advanced countries, if not the highest of the world.

We know, too, that looking down to the end of the century, that there are those who predict that if the present rate of growth continues, that Japan may well have the highest per capita income of all the people in the world 25 years from now.

I could dwell on those subjects which are usually the subjects emphasized when our friends from Japan are present, because in economic growth and economic statistics, Japan leads the world.

But I think for our guests tonight it would be well to point out a very different aspect of this great country, this friendly country in the Pacific, something that I know from knowing the country and from knowing its people.

We should not think of Japan as simply a nation of statistics of economic growth, an economic giant, but we should think of it as it really is. It is a great country though a very small country.

I think it could well be said that never in the world's history have so many people done so much with so little in the way of resources.

I think, too, that it can be said by those who have visited Japan that it is a country that captures the imagination; captures it because of the magnificent landscapes, landscapes that I think Mr. Andrew Wyeth, the great American painter who honors us with his presence, would agree cannot be captured except in a Japanese painting.

We know Japan, those of us who have visited it, because of the incomparable hospitality and the friendship of the people we have met, and we know Japan, and I emphasize this particularly tonight, for another reason: because of the character of its people.

I saw Japan with my wife in 1953, I saw a people who were recovering from the devastation of war. And I knew then what the future would be for Japan, although it exceeded even my own predictions and those of my colleagues as to what would happen, I knew it because of the people that I met, people who did work hard, yes, but people who had the will and also the character of greatness. And it is that character of greatness that is represented by our Honored Guest tonight.

I said when the Prime Minister arrived, that looking to the future, in the last third of this century, whether peace and freedom survive would depend more on what happened in Asia than in any other section of the world.

I think we could put it another way. As we look at the Pacific, the Pacific and Asia is the area of the greatest promise and also the greatest peril. Whether Asia and the Pacific become an area of peace, as the pacific literally translated means, or an area of devastation for Asia and the world, will depend on what happens between the United States and Japan more than between any other peoples in the world. That is because we are the nations with the

greatest wealth, we are the nations with potentially the greatest power.

This is not the time to discourse at length on the great problems that are involved in that future as we look down to the end of the century, but this I know: as I think of the people of Japan, as I think of the character that has brought Japan now to the pinnacle of economic power and wealth which it now has, I look upon this great country not in terms of its richness, economically, but in terms of a wealth that money cannot buy; of the character and strength and courage of a great people.

That is why, Mr. Prime Minister, we in the United States, the American people, are proud that we stand with the people of Japan, working toward the progress and harmony for all mankind which is the slogan of EXPO '70, the Osaka World's Fair of 1970.

I know that all of us will want to raise our glasses, not only to those thoughts and to our Honored Guest, but particularly to His Imperial Majesty, the Emperor of Japan.

ニクソン大統領夫妻主催晩餐会における

同大統領の挨拶(訳文)

(昭和44年11月19日)

総理大臣閣下、令夫人、日本及び米国の来賓各位

佐藤総理御夫妻はじめ御一行の方々をわが国及びここホワイト・ハウスに、公式にまた個人的にお迎えすることは、私の非常に光栄とするところがあります。

かつて日本を訪問したときのことや、総理が私をおもてなし下さったときは、私にとって懐かしい思い出であります。私どもは、佐藤総理にアジア・太平洋地域における偉大な友邦の総理大臣としてここに御臨席いただいたことを非常に光栄に存じております。

日米双方から両国間の友好に深い関心を有する方々がかくも多数御来臨いただきましたこの晩餐会において、どんなことをお話しするのが適切であるか私は考えておりましたが、まず私が考えつくのは、本日の主賓である佐

藤総理のことであり、多年にわたるその国家的指導者としての地位であります。佐藤総理はすでに五年間総理大臣を勤めてこられました。総理が指導者として成功されたことは、氏のお名前の文字どおりの直訳になによりも如実に示されています。私の理解するところ、「榮作」というのは、「繁榮を作る」という意味であり、日本は佐藤総理の下で繁榮を作り出してきております。

日本を訪問したり、日本のことを読んでみたことのある人は、私を含めて、日本が現代における経済発展の奇蹟であるということを知っています。私どもは年率10パーセントという日本の経済成長率は、世界最高とはいえなくても、先進国の中では最高のものであるということを知っています。

私どもは、また、20世紀末まで眼を向けるとき、もし現在の経済成長率がこのまま続けば、今から25年後には、日本が1人当たり国民所得において世界で第1位になると言っている人々がいることを知っています。このように、経済成長や経済上の諸指標をとってみれば、日本は世界に冠たる存在でありますから、日本からやってくる私達の友人が居合わせる席ではとりあげられるのが通例であるこのような話題について敷衍することもできますのでありますが、今夜の来賓の方々に対しては、太平洋におけるこの偉大な友邦の全く別の面、すなわち、その国並びに国民を知悉するに及んではじめて私が知れたことをお話しするのがよいのではないかと思います。

日本を考える場合には、単純に数字の国とか経済成長の国とか、また経済的巨人としてとらえるべきではなく、そのありのままの姿をとらえるべきであります。日本は非常に小さな国ではあります、偉大な国であります。

かくも多くの人々がかくも乏しい資源でかくも多くをなしとげたことは、世界史上その類例をみないといってもよいと思います。また実際に訪問した人であれば、日本はその素晴らしい風景をもって人を想像の世界に誘う国であるということもできましょう。本夕私ども一同その臨席の栄を賜わっている偉大なアメリカの画家、アンドリュー・ワイス画伯なら、日本の風景が日本の絵画以外では表現できないものであるということに賛成されるであります。

私ども日本を訪問した者は、私どもの会った人々から寄せられる他に比類のない歓待ぶりや友情の故に、日本を知っているのであります。また私どもはいま一つの理由によって日本を知っております。それは日本の国民性の故にということであって、とりわけ今夜はこの点を強調いたしたいと思っております。

私は、1953年に妻とともに日本を訪れ、そこで戦争による荒廃から復興し

つつある国民を目のあたりしたのであります。そしてそのときから、私には日本の将来の姿というものが、——それが現実となった姿は、私や同僚の予言をもしのぐものであったとはいえ——よく見通せました。何故ならば、そこでお会いした人々は、非常に勤勉であり、かつ、そのみならず意思と偉大なる国民性を持ち合わせている国民であったからであります。そして今夜の主賓によって代表されているものこそこの偉大なる国民性であるのであります。

私は、総理が到着された際、将来に眼を向ければ、20世紀の残り3分の1の期間において、平和と自由が維持されるか否かは、世界の他のいずれの地域にもましてアジアの情勢いかにかかっていると申し上げました。

これを換言すれば次のように申すこともできましょう。太平洋を眺めれば、アジア・太平洋地域は、最も将来性に富んでいると同時に最も大きな危険をも内包しています。アジア・太平洋地域が「太平洋」という文字が意味するように、「平和」の地域になるか、あるいはアジア及び世界にとり「荒廃」の地域になるかは、世界の他のいずれの諸国相互間の関係にもまして、日米両国関係の成行きいかにかかっています。かく申し上げたのもわれわれ両国は最大の富と最大の潜在力を擁している国であるからであります。

今夜は、われわれが20世紀の末までを見渡した場合、今後生じうべき種々の大問題について長広舌をふるべき場所柄ではありませんが、私には次のごとくだけは分っております。私が日本国民のこと及び日本をして現在あるところの経済力と富の高みにまで至らしめた国民性に思いをめぐらすに当り、私は、この偉大なる国を経済的な意味における豊かさの次元ではなく、金では買うことのできない富、すなわち、偉大なる一国民の国民性と力と勇気という次元に立ってこれを見ているのであります。

総理大臣閣下、以上のようなわけで、われわれ米国民は、1970年の大阪万国博覧会の標語である「人類全体の進歩と調和」に向って、日本国民と足並みを揃え、力を合わせて行くことを誇りに感じている次第であります。

これまで述べました思索と本夕の主賓のため、さらに別して日本国天皇陛下のため、杯を上げて乾杯したいと存じます。

### III. ホワイト・ハウス出発式における ニクソン大統領の挨拶

Remarks by President Richard M. Nixon  
on Prime Minister's Departure from the White House

November 21, 1969

Mr. Prime Minister and Your Excellencies  
who are present here today:

There have been many meetings between the heads of Governments of Japan and the United States over the past 25 years. I am confident that history will record that this is the most significant meeting that has occurred since the end of World War II.

It is customary at such occasions to say that a new era begins in the relations between the two countries involved. I believe today, however, that there is no question that this is a statement of the fact that a new era begins between the United States and Japan, and in our relations not only bilaterally in the Pacific, but in the world.

As the Joint Communiqué which will be issued at 11:30 indicates, we have resolved the last major issue which came out of World War II, the Okinawa problem. And further, we have made significant progress in the resolution of other bilateral issues in the economic field, as well as in the field of investment and trade, not only between our two countries, but in the Asian area.

Mr. Prime Minister, I believe that as we stand here today that in the years ahead, our two Governments and our two peoples will work together toward that great goal which is contained in the slogan of the EXPO 1970 in Osaka, "Harmony and Progress for All Mankind."



ホワイト・ハウス出発式における  
ニクソン大統領の挨拶（訳文）

（昭和44年11月21日）

総理大臣閣下、御列席の皆様  
過ぐる25年間には、日米両国政府間に数多くの首脳会談が行なわれてまいりましたが、私は、今回の会談が、第二次世界大戦後行なわれた最も重要な会談として歴史に残るであろうことを確信しております。

このような会談の際には、両国関係に新時代がはじまったというのがならわしてあります。しかしながら、本日、この言葉がまさにまごうかたなく事実を述べたものであり、また太平洋地域における日米両国関係のみならず、世界における両国関係に、新時代の幕が開かれたと私は信ずるものであります。

11時半に発表される共同声明に示されておりますとおり、われわれは第二次世界大戦から派生した最後の主要問題、すなわち、沖縄問題を解決したのであります。さらにわれわれは、経済の分野における両国間の諸問題並びに日米間にとどまらず、アジア地域における投資、貿易の分野の諸問題の解決にも重要な進展をもたらしたのであります。

総理大臣閣下、私は、本日この席に臨んで、両国政府及び両国民が大阪における1970年の万国博覧会の標語である「全人類の調和と進歩」に標榜される偉大な目標に向かって将来とも末永く協力して行くであろうことを確信しております。

IV. 佐藤総理の離米に当たってのニクソン大統領のメッセージ

Message by President Richard M. Nixon  
to Prime Minister Eisaku Sato

November 25, 1969

Dear Mr. Prime Minister,

Your visit to Washington was a welcome opportunity to renew our personal contact and to consult on the broad range of issues important to our two countries. The mutual understanding which we have achieved and particularly the historic agreement which we

( 84 )

have concluded with regard to the future of the Ryukyu Islands open the door to a continuation of the amicable and fruitful relations which our countries and peoples so happily enjoy.

Mrs. Nixon joins me in hoping that you and Mrs. Sato had a pleasant and rewarding visit to New York and San Francisco. We will long treasure the memory of your visit and the pleasure it brought to us. As you return to Japan please take with you our sincere wishes for your continued good health and for the prosperity of the Japanese people.

Sincerely,

Richard M. Nixon  
President of the United States

佐藤総理の離米に当たってのニクソン大統領の  
メッセージ（訳文）

（昭和44年11月26日）

親愛なる佐藤総理大臣閣下

閣下のワシントン訪問は、私達の個人的親交を新たにするとともに、われわれの両国にとっての重要問題につき、広い範囲で協議を行なうための喜ぶべき機会でありました。私達が成し遂げた相互理解、とりわけわれわれの間に結ばれた琉球諸島の将来に関する歴史的な合意は、われわれの両国及び国民が幸いにも享受している友好的かつ実り多い関係の継続に扉を開くものであります。

私も妻とともに閣下及び令夫人のニューヨーク及びサンフランシスコ訪問が楽しくかつ有意義なものであったことと拝察いたしております。私どもは閣下の御訪問の楽しい思い出を末長く大切にしていきたいと思っております。御帰国に当たって、心から閣下の御健勝と日本国民の繁栄を祈念する私達の気持ちをどうかお国へお持ち帰りください。

( 85 )